

# 井原遺跡群

福岡県糸島郡前原町大字井原字上学所在遺跡調査報告

前原町文化財調査報告書

第 25 集

1 9 8 7

前原町教育委員会







井原遺跡群上学地点全景





祭祀土壤出土土器



# 序

井原地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は昭和56年度から開始され、本年で7年めを迎えました。

井原遺跡群は三雲遺跡群とならんで中国史書魏志倭人伝に載る古代伊都国の中心地として栄えた全国的にも著名な一大集落遺跡であります。この地域における埋蔵文化財の調査はわが国の古代文化の特質を研究するうえで貴重な資料を提供してくれます。古くは天明年間に発見され福岡藩士青柳種信によって報ぜられた井原鎚溝遺跡は古代史研究者の間でも注目的となっており、現在にいたっています。

今回報告された上学地区からは、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡、墓地在多数発見され、当時の村のあり方を研究するうえで大きな成果をあげることができました。これらの資料が広く社会教育、学術研究の場で御活用していただければ幸いです。

昭和62年3月31日

前原町教育委員会

教育長 河原吉美



## 例 言

1. 本書は昭和59年度井原地区県営は場整備事業に伴って実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡は、福岡県糸島郡前原町大字井原他に所在するもので、その小字名をとって井原上学遺跡とする。
3. 遺構実測は、川村博、林 覚、岡部裕俊、石井扶美子が行い、製図は岡部、林が行った。また遺構写真は、岡部、林、川村が撮影したが、空中写真撮影は空中写真稲富によるものである。
4. 遺物実測は、岡部、川村、林があたり、製図は主に岡部が行った。遺物写真は主に岡部によるものである。
5. 本書の作成にあたり、鈴木 信、水ノ江和同（同志社大学大学院）古川秀幸（奈良大学）諸君の協力を得た。また、柳田康雄（福岡県教育委員会）浜石哲也、本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）中村 勝（福岡考古学談話会）各氏から教々の御助言・御助力をたまわった。記して感謝の意を表したい。
6. 本報告書と昭和59年度刊行した『井原遺跡群』Ⅳ所収の「上学地区の調査」における記述内容の相違については、本書における報告を正とする。
7. 本書の執筆、編集は岡部が行った。

# 本文目次

	頁
I はじめに .....	1
1. 調査にいたる経過 .....	1
2. 調査の組織 .....	3
3. 井原遺跡群の地理的環境と調査経緯 .....	5
II 発掘調査の概要 .....	7
1. 調査区の設定 .....	7
2. 遺構各説 .....	7
(1) 住居跡 .....	7
1号住居跡   2号住居跡   3号住居跡   4号住居跡   5号住居跡	
6号住居跡   7号住居跡   8号住居跡   9号住居跡   10号住居跡	
11号住居跡  12号住居跡  13号住居跡  14号住居跡  15号住居跡	
16号住居跡  17号住居跡  18号住居跡  19号住居跡  20号住居跡	
21号住居跡  22号住居跡  23号住居跡  24号住居跡	
(2) 墳墓 .....	36
一 号 竊 棺 墓	
1号石棺墓   2号石棺墓   3号石棺墓   4号石棺墓   5号石棺墓	
6号石棺墓   7号石棺墓   8号石棺墓   9号石棺墓	
1号石蓋土壙墓   2号石蓋土壙墓	
1号木棺墓   2号木棺墓   3号木棺墓   4号木棺墓   5号木棺墓	
6号木棺墓   7号木棺墓	
(3) 土 壙 .....	56
祭祀土壙   2号土壙   3号土壙   4号土壙   7号土壙   9号土壙	
貯蔵穴   6号土壙   12号土壙   13号土壙   14号土壙	
その他の土壙	
(4) 溝 .....	73
溝1   溝2   溝3   溝4   溝5	
(5) その他の出土遺物 .....	88
III おわりに	
付論 井原上学遺跡出土の赤色顔料について .....	91

## 図 版 目 次

- 図版 1 a. 井原遺跡群上学地点全景（上から）  
b. 同 （南から）
- 図版 2 a. 南側調査区（上から）  
b. 西側調査区（上から）
- 図版 3 a. 北側調査区（上から）  
b. 同 近景（上から）
- 図版 4 a. 北側調査区住居跡群の切り合い（南から）  
b. 北側調査区石棺墓群の配列（南東から）
- 図版 5 a. 2号住居跡  
b. 6号住居跡
- 図版 6 a. 7号住居跡  
b. 7号住居跡土師器出土状況（南から）
- 図版 7 a. 8号住居跡（西から）  
b. 同 カマド（南から）
- 図版 8 a. 8号住居跡床面須恵器有蓋高杯蓋出土状況  
b. 8号住居跡埋土中土器一括廃棄状況（西から）
- 図版 9 a. 9号住居跡（西から）  
b. 同 床面土器出土状況
- 図版10 a. 10, 11号住居跡（西から）  
b. 10号住居跡有蓋高杯出土状況（南から）
- 図版11 a. 11号住居跡上面土師器・炭化木出土状況  
b. 11号住居跡下面完掘状況（西から）
- 図版12 a. 13, 14, 15号住居跡（南西から）  
b. 16, 17号住居跡（西から）
- 図版13 a. 18号住居跡（西から）  
b. 同 カマド
- 図版14 a. 18号住居跡中央  
b. 同 拡張後床面土器出土状況
- 図版15 a. 18号住居跡甌出土状況  
b. 18号住居跡完掘状況（西から）

- 図版16 a. 19号住居跡(西から)  
b. 22号住居跡Pit1 出土土製勾玉
- 図版17 a. 23号住居跡(南から)  
b. 24号住居跡(西から)
- 図版18 a. 1号石棺墓(南から)  
b. 同 蓋石除去後(東から)
- 図版19 a. 2号石棺墓(南から)  
b. 3, 4号石棺墓(南から)
- 図版20 a. 5号石棺墓(南から)  
b. 5号石棺墓蓋石除去後(南から)
- 図版21 a. 6号石棺墓(東から)  
b. 7号石棺墓, 1号羨棺墓(南から)
- 図版22 a. 8, 9号石棺墓, 7, 9号土壙遠景(北から)  
b. 9号石棺墓(南から)
- 図版23 a. 9号石棺墓(東から)  
b. 同 (開蓋後)(南から)
- 図版24 a. 8号石棺墓(東から)  
b. 同 (開蓋後)(東から)
- 図版25 a. 1号石蓋土壙墓(東から)  
b. 同 (南から)
- 図版26 a. 2号石蓋土壙墓, 3号木棺墓(北から)  
b. 同 (東から)
- 図版27 a. 1号木棺墓(西から)  
b. 2号木棺墓木棺検出状況
- 図版28 a. 3号木棺墓(北から)  
b. 4号木棺墓(東から)
- 図版29 a. 2, 3号土壙(西から)  
b. 同 近景(西から)
- 図版30 a. 2号土壙土器出土状況(南西から)  
b. 3号土壙土器出土状況(南から)
- 図版31 a. 4号土壙土器出土状況(北から)  
b. 7号土壙土器出土状況(東から)

- 図版32 a. 9号土壙土器出土状況(北西から)  
b. 10号土壙土器出土状況(北東から)
- 図版33 a. 溝3土砂堆積状況(南から)  
b. 溝3底朝鮮系軟質土器長胴甕出土状況
- 図版34 住居跡出土土器
- 図版35 8号住居跡出土土器
- 図版36 11号住居跡出土土器
- 図版37 a. 18号住居跡出土土器  
b. 上学地点出土石器
- 図版38 a. 1号甕棺墓  
b. 1号甕棺墓頸部  
c. 同上 胴部圧痕
- 図版39 a. 1号石棺墓供献土器  
b. 9号石棺墓供献鉄製鎌
- 図版40 2号土壙出土遺物
- 図版41 3号土壙出土土器
- 図版42 4号土壙出土遺物
- 図版43 a. 7号土壙出土土器  
b. 9号土壙出土土器
- 図版44 溝1出土土器
- 図版45 溝3出土土器
- 図版46 溝5出土土器①
- 図版47 溝5出土土器②
- 図版48 溝5出土土器③

## 挿 図 目 次

		頁
第1図	井原上学遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000) .....	2
第2図	井原遺跡群調査区位置図 (1/5,000).....	4
第3図	井原上学遺跡の位置 (1/2,500).....	6
第4図	1号住居跡実測図 (1/60) .....	7
第5図	2号住居跡実測図 (1/60) .....	8
第6図	北側調査区住居跡群の配置 .....	8
第7図	4号住居跡実測図 (1/60) .....	9
第8図	6号住居跡実測図 (1/60) (上) 7号住居跡実測図 (1/60) (下) .....	10
第9図	2, 7号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	11
第10図	8号住居跡実測図 (1/60).....	12
第11図	8号住居跡カマド実測図 (2/5).....	12
第12図	8号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	13
第13図	9号住居跡実測図 (1/60) .....	15
第14図	9号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	16
第15図	10号住居跡 (1/60) 出土土器 (1/4)実測図.....	18
第16図	11号住居跡実測図 (1/60) .....	19
第17図	11号住居跡出土土器実測図 (上層①) (1/4) .....	20
第18図	11号住居跡出土土器実測図 (上層②) (1/4) .....	20
第19図	11号住居跡出土土器実測図 (下層①) (1/4) .....	21
第20図	11号住居跡出土土器実測図 (下層②) (1/4) .....	22
第21図	12号住居跡実測図 (1/60) .....	23
第22図	13, 14, 15, 17住居跡実測図 (1/60) .....	24
第23図	13号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	25
第24図	14号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	26
第25図	16号住居跡実測図 (1/60) .....	26
第26図	18号住居跡実測図 (1/60) .....	28
第27図	18号住居跡カマド実測図 (1/25) .....	28
第28図	18号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	29
第29図	19号住居跡実測図 (1/60) .....	30
第30図	21, 22号住居跡実測図 (1/60) .....	31

第31図	21号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	32
第32図	22号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	33
第33図	23号住居跡実測図 (1/60) .....	33
第34図	23号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	34
第35図	24号住居跡実測図 (1/60) .....	35
第36図	井原上学遺跡における墓群の配列.....	36
第37図	1号甕棺実測図 (1/30) .....	37
第38図	1号甕棺実測図 (1/6).....	38
第39図	1号石棺墓出土土器実測図 (1/4).....	39
第40図	1号石棺墓実測図 (1/30) .....	40
第41図	2号石棺墓実測図 (1/30) .....	41
第42図	3号石棺墓実測図 (1/30) .....	42
第43図	4号石棺墓実測図 (1/30) .....	43
第44図	5号石棺墓実測図 (1/30) .....	44
第45図	6号石棺墓実測図 (1/30) .....	46
第46図	7号石棺墓実測図 (1/30) .....	47
第47図	8号石棺墓実測図 (1/30) .....	48
第48図	9号石棺墓実測図 (1/30) .....	49
第49図	9号石棺墓出土鉄鎌 (1/30) .....	50
第50図	1号石蓋土壇墓実測図 (1/30) .....	51
第51図	2号石蓋土壇墓実測図 (1/30) .....	52
第52図	1号木棺墓実測図 (1/30) .....	53
第53図	2号木棺墓実測図 (1/30) .....	53
第54図	3号木棺墓実測図 (1/30) .....	54
第55図	4号木棺墓実測図 (1/30) .....	54
第56図	5号木棺墓実測図 (1/30) .....	55
第57図	6号木棺墓実測図 (1/30) .....	55
第58図	7号木棺墓実測図 (1/30) .....	55
第59図	2号土壇実測図 (1/30) .....	56
第60図	2号土壇出土土器実測図 (1/4).....	56
第61図	2号土壇出土鉄器実測図 (1/3).....	57
第62図	3号土壇実測図 (1/30) .....	58
第63図	3号土壇出土土器実測図 (1/4).....	59~60

第64图	4号土壤实测图(1/30) .....	62
第65图	4号土壤出土土器实测图(1/4) .....	62
第66图	4号土壤出土铁器实测图(1/2) .....	64
第67图	7号土壤实测图(1/30) .....	64
第68图	7号土壤出土土器实测图(1/4) .....	65
第69图	9号土壤出土土器实测图(1/4) .....	65
第70图	9号土壤实测图(1/30) .....	66
第71图	6号土壤实测图(1/30) .....	67
第72图	6号土壤出土土器实测图(1/4) .....	67
第73图	12号土壤实测图(1/30) .....	68
第74图	13号土壤实测图(1/30) .....	68
第75图	14号土壤实测图(1/30) .....	69
第76图	1号土壤实测图(1/30) .....	69
第77图	1·8·11号土壤出土土器实测图(1/4) .....	70
第78图	8号土壤实测图(1/40) .....	71
第79图	11号土壤实测图(1/40) .....	72
第80图	溝1·2断面图(1/30) .....	73
第81图	溝1出土土器实测图①(1/4) .....	74
第82图	溝1出土土器实测图②(1/4) .....	75
第83图	溝1出土土器实测图③(1/4) .....	76
第84图	溝3·4断面图(1/30) .....	78
第85图	溝3出土弥生土器实测图①(1/4) .....	79
第86图	溝3出土弥生土器实测图②(1/4) .....	80
第87图	溝3出土土器实测图①(1/6) .....	81
第88图	溝3出土土器实测图②(1/4) .....	82
第89图	溝3出土须惠器实测图(1/4) .....	83
第90图	溝5断面图(1/30) .....	84
第91图	溝5出土土器实测图①(1/3) .....	85
第92图	溝5出土土器实测图②(1/3) .....	86
第93图	井原上学遺跡出土土製品实测图(1/2) .....	88
第94图	井原上学遺跡出土鉄器·石器实测图(1/2) .....	89



## 表 目 次

第1表	井原遺跡群における年度別調査地点	5
第2表	溝1出土土器観察表	77
第3表	溝3出土弥生土器観察表	81
第4表	溝3出土土器観察表	84
第5表	溝5出土土器観察表	87

## I はじめに

### 1. 調査にいたる経過

三雲・井原遺跡群は福岡県糸島郡前原町大字三雲・井原に所在する遺跡群である。

三雲遺跡群においては昭和50年度を初年度とする三雲地区県営ほ場整備事業に先だち福岡県教育委員会を調査主体とする緊急発掘調査が前年度の昭和49年度から4ヶ年度にかけて実施された。すでに4巻におよぶ報告がなされ、遺跡の重要性が再認識されることとなった。

三雲地区に続いて、その隣接地域である井田、井原、西堂地区においてもほ場整備事業が計画されることとなったが、これらの遺跡群の発掘調査にいたるまでの経緯は以下のとおりである。

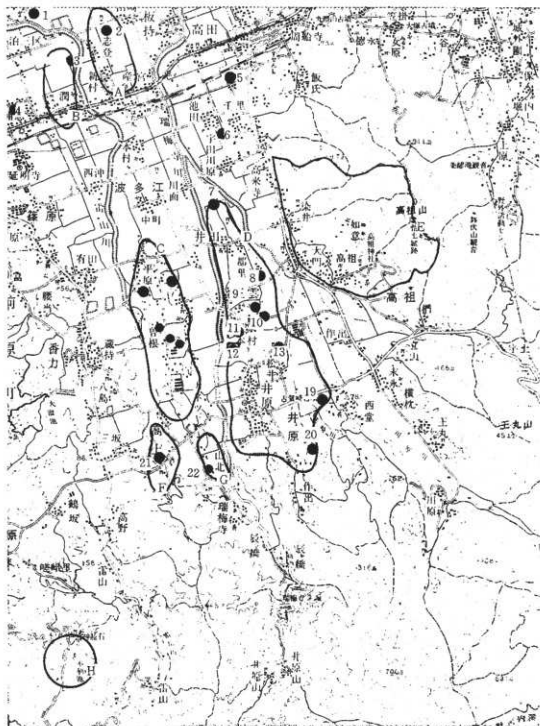
昭和54年頃より、井田、井原、西堂地区を中心とした行政区において、農業の現状を考慮してその発展を阻害する諸々の条件を改良し安定化を図ることを目的に、農地基盤整備事業が計画され、翌55年には福岡県福岡農林事務所、前原町産業課（現農政課）、前原町土地改良区において計画が具体化され推進される運びとなった。

昭和56年度からは、井原地区県営ほ場整備事業として本格的実施段階にはいり、それを受けて前原町教育委員会では福岡県教育委員会文化課の指導のもとに先の三者との協議を行った結果、遺跡の重要性を十分考慮したうえで埋蔵文化財包蔵地の詳細な試掘調査を実施し、可能な限り、遺跡の現状保存を行いながら、工法、事業費等との兼ね合いのなかで最小面積にとどめた発掘調査を実施してゆくことに快諾を得、これを基本方針として昭和57年度より本格的発掘調査を実施する運びとなった。

昭和59年度については福岡県福岡農林事務所より当教育委員会に文化財保護法第57条2の3項にもとづく発掘届が提出されたため、両者に前原町土地改良区、福岡県教育委員会文化課をまじえて数度にわたる協議を行った後、発掘調査の必要箇所を設定し、調査を実施するにいたった。

調査に際して、調査費は原則的には文化財側が国庫補助事業の一環として負担の責を担うものとしていたが、当該年度においては調査面積の増加にともなう期間の超過等もあって、調査費の不足が心配されたため、先の協議にもとづき、その不足分については農政側に依頼して援助をいただくこととなった。

発掘調査に従事した期間は昭和59年8月10日から、翌昭和60年2月2日までで、当該年度中にその概要について報告済みである。本来は昭和60年度中に調査報告書を刊行する予定としていたが、井原地区、長野川流域地区において予定をはるかに上まわる面積のほ場整備が実施されたことに伴う発掘調査量の増加のために、整備期間、報告書刊行費の不足等の支障が生じたために、昭和60年度から翌61年度の2ヶ年度にまたいで報告書の作成準備にあたることとな



1. 泊崎遺跡 2. 志登神社支石墓 3. 志登坂本支石墓群 4. 池志遺跡 5. 千里シビナ遺跡  
 6. 千里支石墓 7. 井田川会支石墓 8. 三雲加賀石支石墓 9. 端山古墳 10. 松山古墳 11. 三雲南小跡遺跡  
 12. 井原上ノ遺跡 13. 井原松井遺跡 14. 曾根石ヶ崎支石墓 15. 平原遺跡 16. ワレ塚古墳 17. 鏡原古墳  
 18. 孤塚古墳 19. 古賀崎古墳 20. 井原赤崎遺跡 21. 高上石町遺跡 22. 山北ハビロ遺跡 A. 志登遺跡群  
 B. 志登西遺跡群 C. 曾根遺跡群 D. 三雲・井原遺跡群 E. 怡上城跡 F. 高上遺跡群 G. 山北遺跡群  
 H. 山北跡群 H. 富山神鹿石

第 1 図 井原上学遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)

った。

最後になりましたが、発掘調査を実施し、報告をまとめるにあたって、下記の諸機関の方々には多方面にわたるご理解、御協力をいただきました。末尾ではありますが、記して感謝の意を表します。

福岡県福岡農林事務所	所長	半田義輔
前原町土地改良区	理事長	中村敬次郎
井原地区県営は場整備事業推進協議会	会長	星丸吉徳
福岡県教育委員会	管理部文化課課長	前田栄一
		窪田康徳 (昭和61年度)
	福岡教育事務所所長	栗石 勲

## 2. 発掘調査の組織

発掘調査の進行、および発掘調査報告書の作成にあたった組織の構成は以下に記すとおりである。

昭和59年度

調査主体 前原町教育委員会

調査担当 同 社会教育課文化係

総括 教育長 豊島禮蔵

社会教育課長 中原直國

同 文化係長 吉村耕治

庶務 同 社会教育係長 徳重 認

主事 久保静代

調査 同 文化係主事 川村 博

同 林 覚

同 囑託 常松幹夫 (59年10月より福岡市教育委員会技師)

同 岡部裕俊 (60年1月より総務課主事補)

昭和60年度

総括 教育長 河村吉美

社会教育課長 野口治三

同 文化係長 吉村耕治

庶務 同 社会教育係長 徳重 認



第 2 图 井原遺跡群調査区位置図 (1/5,000)

庶務 社会教育課社会教育係主事 久保静代

整理 同 文化係主事 川村 博

同 林 覚

同 岡部裕俊

昭和61年度は、社会教育係長が前任の徳重 認から矢野豊秋へ人事の引継ぎが行われた。

### 3. 井原遺跡群の地理的環境と発掘調査の経緯

井原遺跡群は背振山系の北麓にあたり、北には沖積、干拓平野である糸島低地帯を望み、東は奈良時代の朝鮮式山城でかの吉備真備が築城にあつたとされる国指定史跡怡土城を構える高祖山、西は平原方形周溝墓をふくめる古墳時代中～後期の前方後円墳が位置する曾根丘陵に囲まれた糸島第1の平野地帯の南端に位置する。遺跡は川原川と端梅寺川に挟まれた三角地帯の南半部で、三雲遺跡群と北で接する。

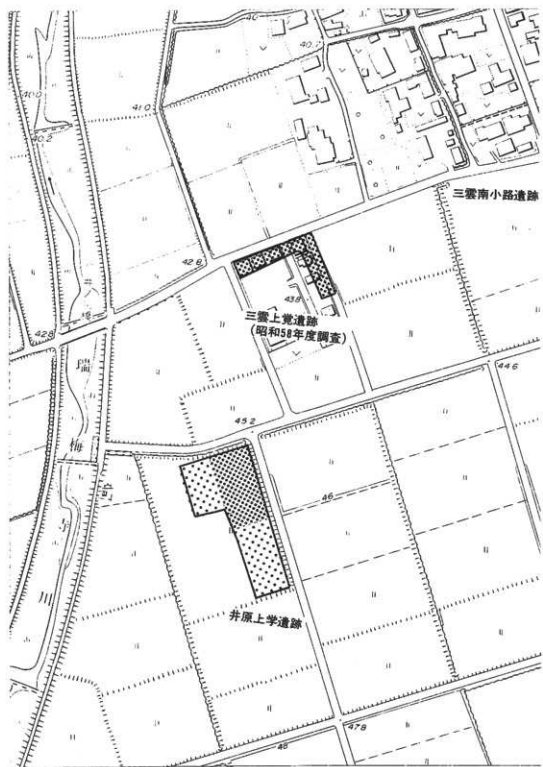
三雲・井原の各遺跡名は行政区分による弁儀上の区分遺跡名として使用しており、本来は古代より、その母体をつつとす一大集落遺跡であつたと考えられる。遺跡発見の経緯は古くは天明年間（1781～88年）の井原窪溝での単棺の喪棺と考えられる一つの壺から方格規矩四神鏡21面以上を含め巴形銅器・刀剣類が出土したのを皮切りに、文政5年（1822年）三雲南小路で銅剣、銅鈴、銅戈、銅鏡の出土が記録されており、また、発見年月日、状況等が明確ではないが、井原赤崎からは細形銅剣が出土しているというように、上げれば枚挙にいとまがない。

三雲地区については昭和49年度から53年度にかけて三雲地区県営は場整備事業に先立って行われた発掘調査によって、その一部が公表されている。井原地区については前述のように56年度を初年度として、61年度までに計13箇所以上に及んでおり、調査地点は第2図、概略は第1表に記している。D

地点からは弥生中～後期にかけての喪棺墓群が発見されており、松井Ⅰ～Ⅲ区では古墳前期布留式平行期の住居跡群が、A地点および丁ノ坪Ⅰ区からは古墳時代後期～中世の建物群を検出している。

調査年度	調査地点	調査期間	遺構概要	報告書
昭和56年度	A	昭和56年11月9日		前原町文化財調査報告書 第8集 1982
	B			
	C	昭和57年2月15日		
	D			
昭和57年度				前原町文化財調査報告書 第10集 1983 前原町文化財調査報告書 第19集 1985
昭和59年度	下町	昭和59年8月10日	本書に掲載	前原町文化財調査報告書 第21集
	松井Ⅰ	昭和60年2月2日		
	上学			
昭和60年度	松井Ⅰ-2			現在発掘調査報告書作成中
	松井Ⅱ			
	松井Ⅲ			
昭和60年度	丁ノ坪Ⅰ	昭和61年7月		
	丁ノ坪Ⅱ	9月		

第1表 井原遺跡群における年度別調査地点



第 3 図 井原上学遺跡の位置 (1/2,500)

## II 発掘調査の概要

### 1. 調査区の設定 (第3図)

遺跡は瑞梅寺川により侵食・形成された河岸段丘を西にひかえて立地している。当初は南北100m・東西50mの範囲で調査区を設定していたが、表土、遺物包含層を除去した段階で、南半部と西側段丘斜面が削平後の標高より已に下位にあることが判明したため、調査費、期間等を考慮して、南半部は、調査中途であったが、遺構を埋め戻し、西半部はトレンチを3本掘って、層位を確認するにとどめることとなったため、(第3図 粗アミカケ部分)実質的に調査を実施したのは北東部の南北50m、東西30mの長方形地区(第3図 密アミかけ部分)に限定されることとなった。南半部には調査区西側を北に貫流する溝数条と、数棟の住居跡、柱穴群を検出している。溝・柱穴・住居跡の一部は已に掘り下げており、溝、住居跡からは多量の土器、土製品等が出土しているが、紙面の都合により次報告にまわしたい。

### 2. 遺構各説

#### 住居跡

弥生時代の住居跡を6棟、古墳時代の住居跡を19棟確認している。以下その概要を報告する。

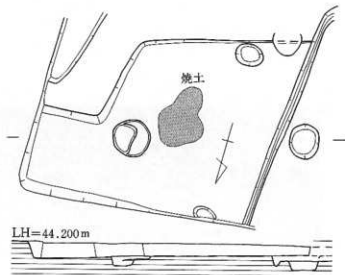
#### 1号住居跡(第4図)

調査区の北東隅に位置する住居跡で西側を2号住居跡に切られている。現況は不整形で南東端がL字状に内側に突出している。床面は平床かつ住居の重複等はみられなかったので削り出しのベッド状遺構を考慮する必要がある。主柱穴は一部2号住居跡にかかっており柱間は2.7mを計る。周溝は検出されていない。P-1西から南北1m、東西80cmの不西楕円形の焼土面がみられたが、床面を掘り込まれたものではないため炉跡とするのは疑わしい。

埋土中より弥生中期後半土器片、夜臼式土器片、鉢片が出土しているが、夜臼式土器は溝5にともなうものであろう。

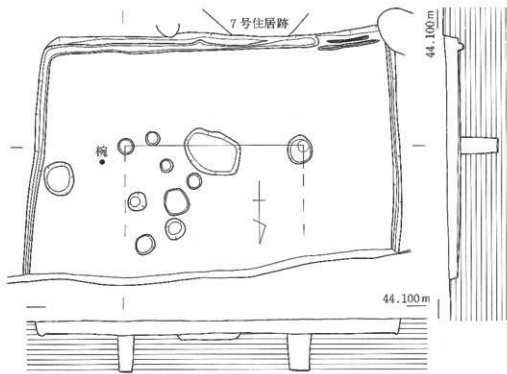
#### 2号住居跡(図版5)

前述の1号住居跡の西



第4図 1号住居跡実測図(1/60)





第 5 図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

側で1号住居跡および7号住居跡を切って掘り込まれた住居跡である。主軸はほぼ南北に向かう正方形あるいは長方形プランの住居跡である。4本主柱であると考えられ南主柱の東西柱間は2.8mを計る。周溝は既調査地三辺をめぐるが、南側周溝は壁より8cm程内側にめぐっている。また南西隅は細い二条の周溝にかわっており何らかの通用口施設が設けられていたことを窺わせる。

埋土中からは、弥生土器片、古式土師器、須恵器片等が出土している。



第 6 図 北側調査区の住居跡群配置

第9図に図示した土師器碗1は東側床面から出土したもので、ほぼ完形に復元できた。口縁径14.6cm器高5.5cmで、外面はタテハケの後口縁下はヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリを施し、内面はヨコナデ、押圧の後底部にラセン状の細いヘラナデが暗文状に行なわれている。胎土には緻密な粘土が用いられており、赤褐色、焼成も良い。他に埋土中より、土師器碗高杯脚部、須恵器甕片、壺片が出土している。

### 3号住居跡

2号住居跡の西に位置する西南隅が調査区北端にやっとかかる程度の掘り方をもつ住居跡状の遺構である。検出した南壁から推定する遺構の主軸は1号住居跡、4号住居跡と同方向である。主柱穴、厨溝等は検出することができなかった。埋土中より弥生土器片が出土している。

### 4号住居跡(第7図)

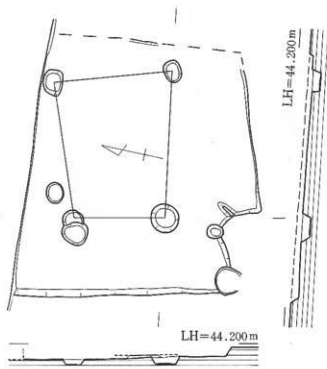
2号住居跡の西側に位置する南北主軸を $N-14^{\circ}-W$ にとる住居跡で、1、2号木棺墓、1号石棺墓に切られる。住居の壁は北側が調査区外にかかり、東壁は、1、2号木棺墓に切られているため、正確なプランは判然としませんが、南西隅が内側に張り出しているため、1号住居跡と同じく削り出しのベッド状遺構の存在を想定できる。4本主柱の住居跡であろう。炉跡、カマド等は検出していない。埋土中には弥生土器片が出土している。

### 5号住居跡

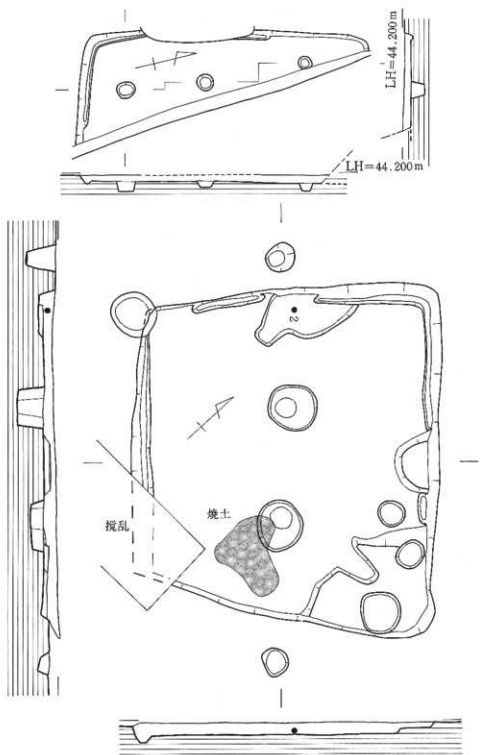
調査区北西隅に溝1を切って掘り込まれた住居跡であるが、西隅壁は削平を受けており、プラン等については不明である。埋土から古式土師器甕片が出土しているが、住居にともなうものではない。

### 6号住居跡(図版5,第4図)

8号住居跡の北側に位置する住居跡で、南北主軸は $N-13^{\circ}-E$ にとる。南北長4.64mである。南西壁付近には厨溝を検出した。床面には3個の柱穴がみられたが、主柱と特定できるにはいたらぬ



第7図 4号住居跡実測図(1/60)



第 8 图 6号住居跡実測图 (1/60) (上) 7号住居跡実測图 (1/60) (下)

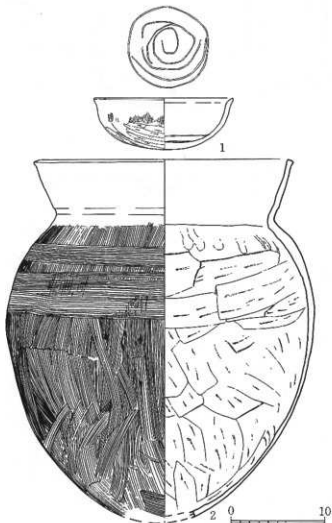
かった。埋土中より弥生中期後半土器片、古式土師器片が出土しているが実測にたえられるものではなかった。

#### 7号住居跡 (図版6, 第8図)

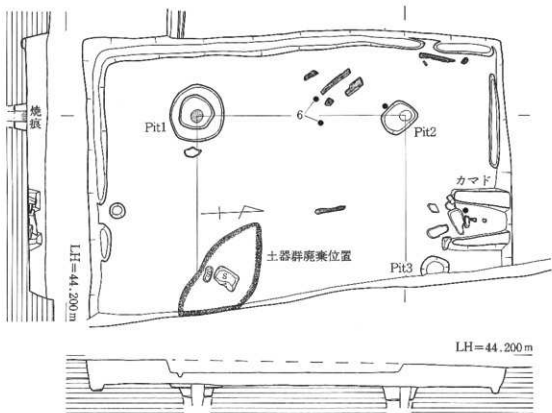
12号住居跡を切って建つ住居跡で、南北主軸をN-49°-Wと大きく西側に主軸に傾けて建てられている。平面プランは南西壁が短い台形上を呈しており北西-南東主軸上に2本の大きな柱穴をもち、その延長線上にやや小さめの柱穴が続くことから、住居外に棟持柱をもつ2本主柱住居跡であろう。東隅にカマド状の削り出し部をもつが、その内側から明らかな焼土、灰層はみられなかった。周溝は南西壁をのぞく3面にめぐっている。北東壁中央には階段状の土盛りがみられる。北西壁中央に不整形の浅い土壇が検出され、埋土中から図示した大形甕が出土している。住居跡の埋土からは縄文晩期土器片、弥生中期土器片、布留式土器甕等が出土している。

#### 出土土器 (図版34, 第9図)

2は復元口径26.2cm、器高は38.2cm前後になる大形甕で、やや尖りぎみの底部からやや肩の張る胴部にむかい、口頸部はくの字状に外反する。口唇部は平端面をなし心なしか外側につまみ出されている。胴外面はタテハケ、肩部に三条のヨコハケを施しており、内面は下半にタテ方向のケズリ、肩部にヨコ方向のケズリ、口頸部下にはナデ、押圧痕が残る。口頸部には内外面ともヨコナデ調整を行っている。胎土は白色小砂粒を含み、色調は淡明茶褐色で焼成は良い。以下は図示していないが説明を加える。



第9図 2, 7号住居跡出土土器実測図 (1/4)

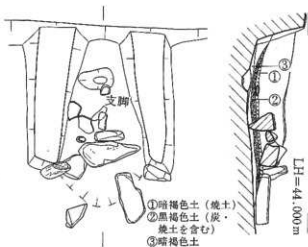


第 10 図 8号住居跡実測図 (1/60)

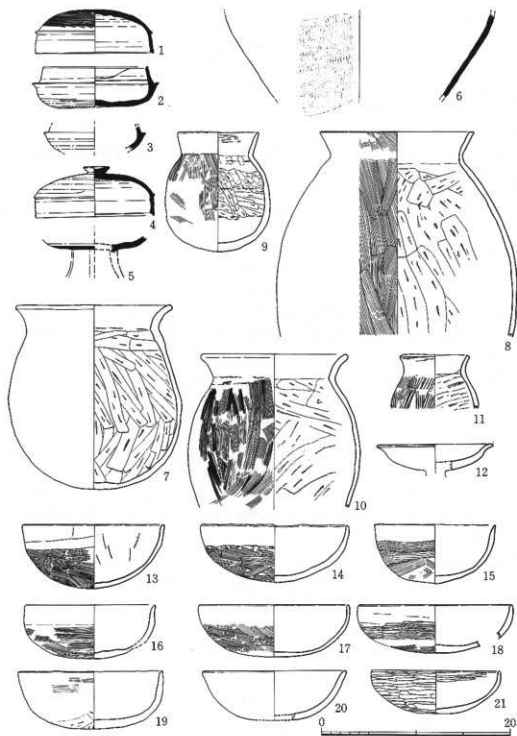
妻は口頭部がくの字状に内傾ぎみに外反し、口唇部は平端面をなして内面につまみ出している。

胴部内面はヨコ方向のヘラケズリ、外面はタテハケの後ヨコナデが施され、口頭部はヨコナデが施されている。胎土には赤色砂粒が多く含まれており、色調は淡桃褐色、焼成も良い。鼓形器台は外面および内面上半部はヨコナデ、内面下半はヨコケズリを施す。白色砂粒を多く含む淡桃褐色で焼成も良好である。

8号住居跡(図版7,8第10,11図)



第 11 図 8号住居跡カマド実測図 (1/25)



第 12 图 8号住居跡出土土器実測図 (1/4)

東半部を調査区外に残す方形プランの住居跡である。12号、13号住居跡、溝5を切って掘り込まれており、18号住居跡と共存していたものであろう。主柱は4本柱で南北の柱間は3.3mを計る。側壁下には周溝が掘り込まれていた。

北壁中央付近には黄色粘土によってカマドが築かれていた。天井部は崩落しており、埋土中とりわけ焚出し口付近には拳大の礫塊が散在しており、その中に手捏ね土器が混在していたことなどから、カマド廃棄時の祭祀行為の跡であろう。

床面から有蓋高杯蓋、埋土中から土器を一括廃棄したとみられる土器集中地点から土師器碗、須恵器杯等が出土している。

#### 出土土器（図版35、第12図）

4、6は住居跡床面上、3、5は埋土中から、その他は調査区東端にかかるとみられる一括廃棄土器群中から出土した。

1～6は須恵器で1は杯蓋、口縁径12.4cm、器高4.7cm、口唇部は内傾する平端面をなしており天井部は湾曲しカキメがみられる。胎土に角閃石粒を多く含む良好な粘土で色調は青灰色をなし焼成も堅緻である。2は杯身で口縁径10.9cm、器高4.3cmを計る。口唇部は内傾する平端面をもち、底部は平端でかつ中心を上方へ押し込んでいる。外底部は回転ヘラケズリ調整を行っており、内面口縁立ち上がり下部には一条の工具による沈線がめぐる。胎土は角閃石粒を多く含む粘土で色調は淡灰黒色、焼成は堅緻である。4は有蓋高杯蓋で、天井部に扁平なつまみを有している。口縁部は直立し天井部はやや扁平形を呈している。天井部は丁寧な回転ヘラケズリを施している。胎土は精良な粘土で色は青灰色、焼成も堅緻である。5は高杯底部で脚接合部の欠損痕跡から、4方向の長方形遺かしが施されていたことを確認した。杯底部にはカキメが見られる。6は中形甕胴下半部片である。外面にはタテ平行タタキを行った後でナデ消しを行っており、内面は同心円タタキの後に丁寧にナデ消している。器壁は薄い。胎土は角閃石粒を多く含む良好な粘土で色は暗灰白色、焼成は堅緻である。外面に暗灰色の薄い皮膜質が付着している。

7～21は土師器である。7、11は小形、9、10は中形、8は大形甕である。9は外面が熱を受けているために剥落が著しく外面の調整が判然としないが、いずれも胴部最大径を中央より下位にもっており、外面は細いタテハケ、内面は細いケズリ調整で仕上げる。口縁、口唇部の形態には多様性がみられる。12は器台杯部片であろうか。口唇部下でゆるやかに外反する。13～21は碗である。底部を粗いヨコハケ、ケズリで仕上げる粗製のもの、21にみられるように丁寧なヨコ研磨で仕上げる精製品に分けられる。外面形態は器高の高いものから低いもの、半球形を呈するものから扁平球形を呈するものまで多様性に富む。

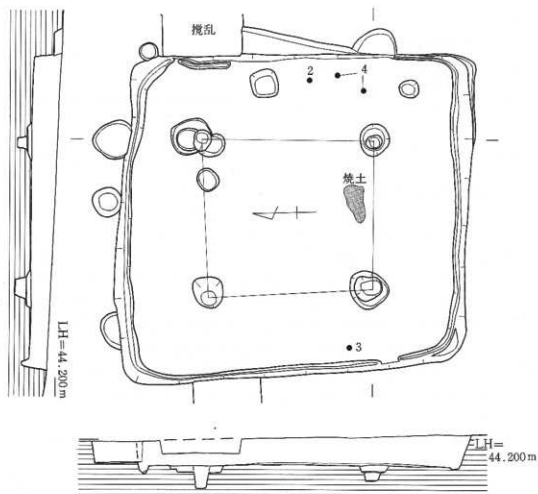
これらの土器は出土した須恵器の特徴から5世紀中葉に位置づけられるものであろう。

9号住居跡（図版9，第13図）

8号住居跡のほぼ東8m程に位置する竪穴住居跡で、南北主軸長5.5m、東西幅5.1mを計る。現深さは残りの良い箇所で45cm程である。平面プランは不正方形で、支柱は4本、ほぼ住居側壁に平行して柱穴が掘られている。周溝は東側壁下を除く三方にめぐっており、東壁下においても南北両端部には一部周溝がめぐる。

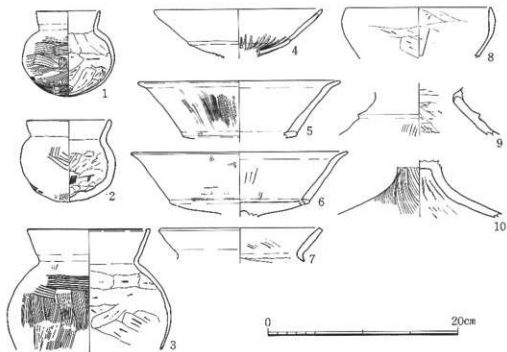
住居跡中央部南寄り地点で床面直上より焼土塊が検出されたが、床面を掘り凹めた炉ではない。東側壁中央と、南東隅地表下13cm程の平端なテラスがみられるが、弥生中期後半の方形竪穴住居である可能性をもつ。

住居床面から、土師器甕、高杯、鉄錐が、埋土からは古式土師器片とともに多くの弥生土器片が出土している。



第 13 図 9号住居跡実測図 (1/60)





第 14 図 9号住居跡出土土器実測図 (1/4)

**土器 (図版34, 第14図)**

2, 3, 4は床面出土, 他は埋土出土で, いずれも古式土師器である。

1, 2は小型丸底壺で, 1は口縁径6.8cm, 器高9.0cm, 胴部最大径9.8cm, 胴部はほぼ球形で, 口頸部は大きくくの字状に反転し, 上外方へやや内弯ぎみに立ちあがり, 口唇部は尖りぎみに丸くおさめる。胴外面は粗いヨコハケ, 内面は下半部にケズリを施し, 上半はナデ押圧で仕上げる。胎土には長石粒を含む良質な粘土を使用しており, 色調は淡赤褐色, 焼成は良好である。

2は口縁径8.5cm, 器高8.8cm, 胴部最大径10.1cm, 胴部はやや扁平で器壁が厚く仕上りの雑な張りのない感じを与える。口唇部は丸くおさめている。胴外面は粗いハケの後ナデ調整, 内面は粗くケズリを加えた後にハケ, 指押圧による再調整を行う。胎土には精良な粘土を用い, 色調は淡桃褐色で焼成も軟質である。器表の剥落が著しく, 胴中央に帯状にとりまいてすずの付着がみられる。

3は甕で, 口縁径13.0cm, 胴部最大径17.4cm, 胴部はほぼ球形状を呈し, 口頸部は鋭く屈曲し, 上外方へ直線的に伸びる。口唇部は内傾する面をもち内側へ軽くつまみ出す。胴外面はクテハケを施し, 肩部に粗いヨコハケが一条めぐる。内面は丁寧にケズリを加え調整しているため器壁は薄い。口頸部はヨコナデ調整で仕上げている。胎土は長石, 角閃石粒を含む粗い粘土を

使用しており、色調は暗茶褐色で、焼成は良行である。器表は二次焼成を受けているため、外面には煤の付着が認められ、器表の剥落が著しい。

4～6は高杯である。4は口縁径17.6cm、杯内底部までの深さは4.5cmを計る。杯底部と口縁部立ちあがりの境には明瞭な段を有しており、底部は若干内湾しながら屈曲部にのびるが口縁部からはほぼ直線的で、やや外反しながら大きく口唇部に向かって開く。器表面には全体丁寧にヨコナデが行われているが、底内面には放射状にヘラ研磨が暗文状に行なわれる。胎土は長石角閃石粒を含む良質の粘土を用いており、色調は赤褐色、焼成は良好である。

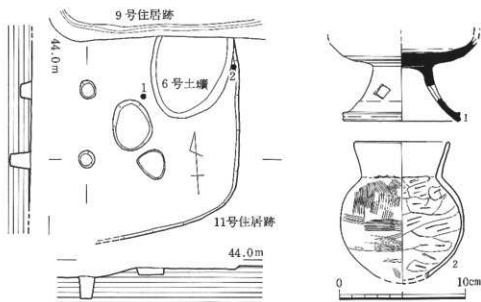
5、6はほぼ同様の形態を示すが、5は口縁径21cm、6は22.6cmと、6がやや径が大きい。5は底内底部までの深さが5.4cm。杯部は平端で、口縁部立ちあがりでの字状に屈曲して直線的に上外方に伸びるが口唇部下で若干外側に外反する。内外面ともにはヨコナデが施されており、口縁立ちあがり部にはタテハケ調整を行った痕跡を残す。胎土には長石、雲母片等を含む粘土を使用し、色調は淡黄褐色、焼成は良いが、やや軟質か。口縁辺に黒斑がみられる。6は5に比べやや外面ヨコナデが不十分でタテハケの痕跡がより明瞭に残る。胎土には大粒の長石、角閃石粒を多く含み、色調は淡桃褐色、焼成は良好である。

7は瓠口縁片である。器壁はやや厚めで、胴部から口頸部へはくの字状に屈曲し、口唇部は断面コの字状を呈す。内外面ともヨコナデ調整が行われているが胴内面には一部ヘラケズリの痕跡がみられる。復元口縁径16.6cmを計る。胎土には雲母片を含む良質の粘土を使用し、色調は明褐色、焼成は良好である。

8は椀形土器片で復元口縁径15cm、口唇部は尖りぎみに丸くおさめているが、口縁部下ではケズリが施されていないため器壁が異様に肥厚する。外面はケズリを施し口縁部下にはナデ内面には板ナデがみられる。胎土は良好で雲母片を含む精緻な粘土を用いる。色調は明赤褐色で焼成は良好である。

9は鼓形器台脚部で脚部が欠失しており、くびれ部外径は9.2cmを計る。脚部突帯は鈍く、下方に下がりぎみに引き出されているにすぎない。外面はヨコナデ、内面は、くびれ部下には右下部へのケズリ、くびれ部にはヨコナデを施している。受部にもヨコナデがみられるが軽いケズリ調整の痕跡も窺われる。胎土は精良な粘土で、色調は淡橙褐色を呈し焼成は良好である。

10は脚付鉢の脚部であろうか。接合部から裾部に向かってゆるやかに広がる。外面は右下方へのナメハケを行った後粗いナデで仕上げられており、内面には絞り痕跡がみられる。胎土には長石、角閃石粒を含む良好な粘土を使用しており、色調は黄褐色で焼成は良好である。



第 15 図 10号住居跡 (1/60) 出土土器 (1/4) 実測図

#### 10号住居跡 (図版10, 第15図)

9号住居跡の南西部に位置し, 9, 11号住居跡と切り合い, 最も新しい住居跡である。調査当初掘り下げ時に遺構の住居跡の埋土が全て黒褐色土でかつ西側段丘斜面の土器包含層(第3層)と重複していたため, 遺構の切り合い関係が判然としなかったことから, 9号住居跡の床面を検出した後に西側壁を確認するという変則的な調査手順を踏んだため, 10号住居跡との切り合い関係を現地で確認できなかったが, 土器を整理することによってその先後関係について上記のような結論を提示するにいたった。

平面プランは隅丸形状あるいは長方形を呈すと思われ, 9号住居跡と切り合って掘り下げられている6号土壇も10号住居跡に伴う遺構であろう。18号住居跡の床面のレヴェルと□cm程の差があることから, 平床式あるいは半竪穴式建物となるのかもしれない。確実に主柱穴と確定できる柱穴は認められなかった。床面からは須恵器杯蓋片と小形丸底壺が出土しており, 埋土から須恵器杯蓋片装調部片等が出土している。

#### 出土土器 (図版34, 第15図)

図示した2点はいずれも床面出土土器である。

1は短脚高杯で, 脚中に斜位に方形透かしを三方に設けている。杯底部の立ちあがりの屈曲度から察すると有蓋高杯となるであろう。脚裾部は凹面をなす。脚裾径8.9cm。杯内面は回転ヨコナデ, 外面体部はヨコナデ, 底部にはヘラケズリを行う。脚部は内外面ともヨコナデを施し

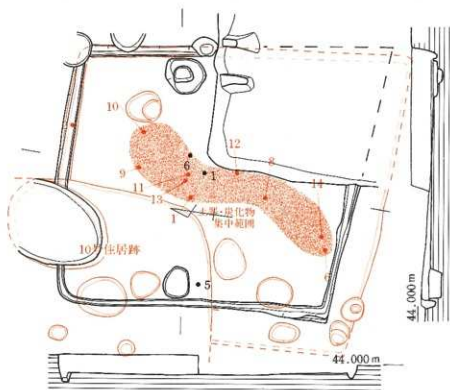
て仕上げる。胎土には長石粒を多く含む良質の粘土を使用しており、色調は淡灰白色で焼成も良好堅緻である。

2は復元口径径7.4cm、胴部最大径9.8cm、器高は11.3cm前後であろう。胴部はほぼ球形で口頸部は鋭くくの字状に屈曲して上外方に向け伸び口唇部にいたる。胴外面はハケ調整、内面はヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。口頸部は内外面ともヨコナデ調整を行う。胎土は長石角閃石粒を多く含む、色調は淡橙褐色で、焼成は良好である。

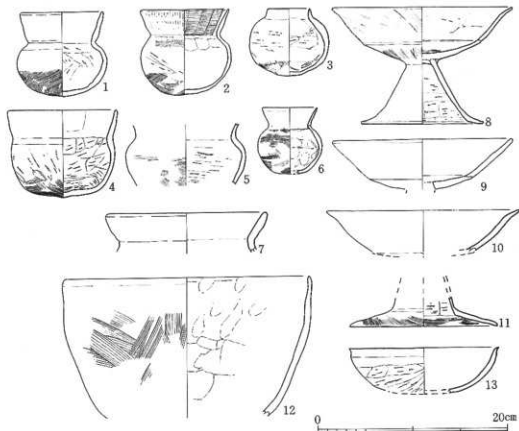
#### 11号住居跡 (図版11, 第16図)

9号住居跡の南に位置し、10、18号住居跡に切られる竪穴住居跡である。

平面プランは平行四辺形を呈している。住居跡は2層に分かれており、上層の住居跡のほうが、南に60cmほど広がっていることから、少くとも一度住居跡の拡張工事が南に行われていることを示唆している。上層は北西部を10号住居跡に切られており、西側は段丘斜面にかかり削平を受けているためその規模は判然としないが、南北主軸方向は $N-7^{\circ}-W$ 南北主軸全長5.26m幅は4.7m前後であろう。下層は主軸長約8mで、上層住居跡には北、東側壁下に周溝が掘り込まれ、下層には全局に周溝がめぐっていた。いずれも主柱穴と確定しうる柱穴は検出できな



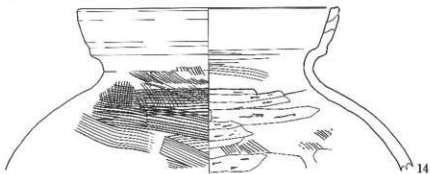
第 16 図 11号住居跡実測図 (1/60)



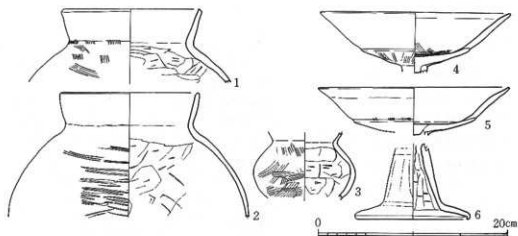
第 17 図 11号住居跡出土土器実測図(上層①)(1/4)

かった。上層床面に焼化物と土器が集中している範囲がみられ厚く堆積しているが、柱材等がみられず、細木材、焼失家屋ではないと思われる。

上層出土土器(図版36, 第17, 18図)



第 18 図 11号住居跡出土土器実測図(上層②)(1/4)



第 19 図 11号住居跡出土土器実測図(下層①)(1/4)

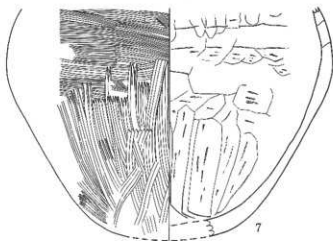
2以外の土器は全て前述の土器・炭化物集中範囲内からの出土である。

1, 2は小形丸底壺である。1は口縁径8.5cm, 器高9cm, 胴部最大径9.1cmを計り, 胴外面はハケ調整の後, ヨコナデ調整で仕上げるが, 胴下半部にはハケ痕が明瞭に残る。内面胴部はケズリ調整の後強いナデを施す。口頸部はヨコナデで仕上げる。胎土には雲母片を多く含む精良な粘土で色調は明茶褐色, 焼成は良好である。胴中央部下に6×5cmの長楕円形黒斑が残る。2は口縁径9.3cm, 器高8.9cm, 胴部最大径9.6cmで, 1に比べやや器壁が薄い。外面は全てハケ調整の後ヨコナデを施すが, ナデは粗くその痕跡を随所にとどめる。胴内面はヘラケズリ, 口頸部屈曲部下には押圧調整, 口頸部内面にはヨコ断続的ハケの後簡単にナデ仕上げする。胎土は角閃石粒を多く含む精良な粘土で明褐色を呈し, 焼成は良好である。胴部幅10cm程に薄く黒斑がみられる。

3は短頸壺口縁径4.4cm, 器高7.1cm, 胴部最大径8.4cm, やや平底がかった底部をもち, 球形の胴部を経て若干内傾ぎみの短い口頸部にいたる。肩部はケズリが行われていないために肥厚する。胴下部にはハケ調整後ヨコナデが行われ, 中央部にはヨコケズリ, 上部から口頸部にかけてはヨコナデが行われる。胎土は角閃石粒を多く含む色調は暗茶褐色で焼成は良好である。4は小鉢で口縁径11.3cm, 器高9.2cm。底部中心が下方へ鈍く突出するが, 平端で, 胴部から口頸部にかけては途中口頸部との境でややくびれるものの上方向張りをもたず伸びる。外底部にはハケ, 胴部は上方へケズリ, 内部はケズリを施し, 口頸部内外面ともヨコナデで仕上げる。胎土は赤褐色斑粒を多く含む粘土を用いており, 色調は淡桃褐色, 焼成は軟質である。5は直口壺胴部で復元胴部最大径12.7cm肩が張っている。胎土には雲母片, 角閃石粒を多く含む粘土で色調は明赤褐色, 焼成は軟質である。6は小形直口壺である。口縁径5.7cm, 器高7cm, 胴部最大径6.8cmを計る。底部は平底ぎみで胴部は若干肩に張りをもつ。頸部の器壁は薄く外側に外反

する。胴外面はハケの後ナデ仕上げ、内面はナデ押圧により整形する。口頸部と胴部の接合痕跡は明瞭に観察される。胎土は長石粒を含む精良な粘土で色調は赤褐色焼成は良好堅緻である。

7は甕口縁片で、胴上部からくの字状に屈曲した口頸部は内湾ぎみに口唇部にいたる。口唇部は丸くおさめている。胎土は良質の粘土で、色調は明黄褐色、焼成は良好である。



第 20 図 11号住居跡出土土器実測図（下層②）(1/4)

8～11は高杯である。8は実測図により図上復元したもので、口縁径18.8cm、器高12.3cm、脚徑12.8cm程度、脚部は杯部との接合部から大きく開いて裾部に伸びている。杯部は底部と口縁部との間に明瞭な段を有し、口縁部は若干内湾しながら広がり口唇部下でさらにゆるく外反して終束する。

杯外面はナメハケを加えた後、回転ヨコナデで仕上げられており、内面は回転ヨコナデ調整。脚柱外面は板状工具によってナデした後、粗い研磨を施し、内面はヨコケズリを加えて内外面とも裾部のみヨコナデで仕上げている。全体的に器壁が薄い丁寧な仕上げといえる。胎土は白色砂粒を含むやや粗い粘土で、色調は淡紫褐色、焼成は堅緻である。

9、10は杯部片で、9は口縁径18.8cm、10は20.3cm、10は口唇部下で外反し、8と同様の形態を示すのに対して9は杯口縁がまっすぐ上外方へ伸びる。内外面ともヨコナデ仕上げている。胎土はいずれも小砂粒を含むがおおむね精良な粘土で、9は淡黄褐色、10は赤褐色を呈し、焼成はともに良好、やや軟質というところか。11は脚部片で径15.6cm、大形の高杯である。裾部は内外面ともハケ調整の後ナデ仕上げが行われている。

12は粗製の大型鉢で復元口縁径25.8cm、体外面中央は粗いハケ調整、底部はナデで仕上げられており、内面はヨコケズリを行い、口縁部下には軽くヨコナデ、指押圧で仕上げる。胎土は雲母白色砂粒を含む粘土を用いており、色調は淡灰褐色、焼成は良好である。

13は椀で復元口縁径15.8cm、器高は低い。口縁部がつまみ出されて鋭く外反しており、口唇部は尖っている。外面下半はケズリ、上部はヨコナデが行われ、内面は回転ヨコナデ、あるいはナデ仕上げである。胎土は、良質、精良な粘土が使用されており、色調は濃赤褐色、焼成は

やや軟質で、底部に黒斑が観察される。

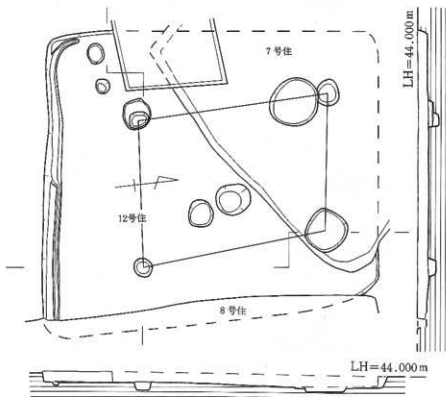
14は大形の複合口縁壺上部片で、復元口縁径は27.3cm、胴部はさほど肩の張らないカーブを描き口頸部との境も不明瞭である。胴外面はタテハケの後、肩部にのみ粗いヨコハケ、内面はタテハケの後に粗いヨコケズリが行なわれている。胎土は雲母、角閃石粒等を多く含む粗い粘土で、色調は白みを帯びた淡黄褐色、焼成は良好である。

#### 下層出土土器（図版36、第19,20図）

1、2は甕、3は小形丸底壺、4～6は高杯、7は壺である。

1は口縁径14.2cm。胴外面は粗いハケの後ナデ、内面はヨコあるいはナナメケズリを施し口頸部は直立ぎみにまっすぐ上外方へのびる。胎土は大粒の白色砂粒を含む粒い粘土を用いており、色は淡橙褐色で焼成は良好である。2は口縁径14.0cmを計り、胴上半は球形状をなし、外面はヘラ状工具による粗いナデつけが行われる。口縁部は内湾ぎみに直立する。1と同様に口頸部はヨコナデ仕上げが行われる。胎土は長石、角閃石粒を含む良質な粘土が使用され、明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

3は肩が下がった胴部を有している。外面肩部から下はハケ調整のみ、上部はハケの後ヨコ



第 21 図 12号住居跡実測図 (1/60)



ナデを行っており、内面はヘラケズリ調整を行う。胎土には雲母片等の細い砂粒を含み、色調は暗黄褐色で焼成は良好である。

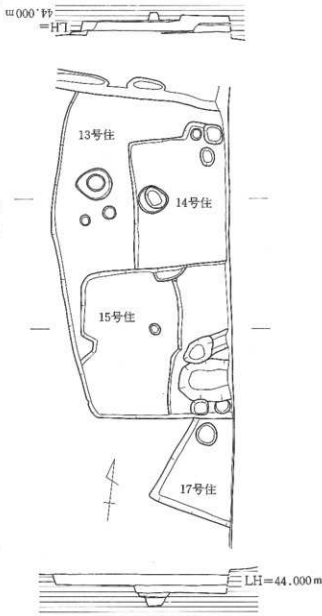
4, 5は同様の形態を示すが4の方がやや調整が粗い。4は口縁径19.9cm, 5は19.6cmで口縁立ちあがり部は若干外反ぎみに上外方へ伸びる。共に雲母片, 角閃石粒を多く含む粘土を使用しており, 色調は赤褐色で5がやや淡い。焼成は共に良好である。6は脚部で脚柱から裾に向けてくの字状に反転し, 端部は下方に向けて折り曲げている。脚柱外面はタテ方向のナデ, 内面はヨコケズリを行い裾外面はケズリ調整の後ナデ, 内面はヨコナデで仕上げる。胎土は雲母片, 長石粒を含む粘土が使われており, 色は暗褐色, 焼成は良好である。

7は胴肩部下のみで復元最大径は35.4cm。最大径部から底部に向けて直線的に下がる。底部はやや平端な丸底と推される。下半部外面は粗いタテハケ, 内面はタテケズリを施す。最大径部外面はヨコハケがめぐり, 内面にはそれに呼応してヨコケズリを行う。胎土は大粒の長石粒を含むが, おおむね良質の粘土で, 色調は赤褐色を呈し, 焼成は良好である。

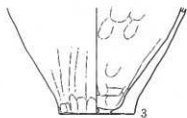
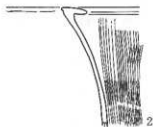
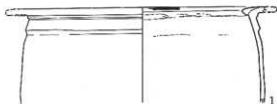
#### 12号住居跡 (図版11, 第21図)

7号住居跡と8号住居跡の間に挟まれ, 両住居跡に大きく切られており, 南側壁と北東隅壁が穿うじて残存するのみである。平面プランは南北に長い長方形形状を呈しており, 南北主軸長は5.3m程度のものになるであろう。主柱は4本に復元され東西柱間は, 2.36m南北柱間は5.04mを計る。南側壁下には周溝が確認された。

埋土中より縄文時代晩期, 弥生時代中期後半～後期の土器片等が出土している。



第 22 図 13, 14, 15号住居跡実測図 (□/□)



第 23 図 13号住居跡出土土器実測図 (1/4)

観察される。胎土は長石粒等を含む粘土で、色は淡赤褐色を呈し焼成も良好である。2は1に比べ胴張りが著しく口唇部の径を上回る胴部最大径を有する。口縁部は逆L字状を呈し、口唇部は口縁上面よりやや下がり丸くおさめている。外面はタテハケ、内面はナデ調整がみられる。胎土には角閃石粒を多く含む色は明赤褐色、焼成は良好である。3は胴下部で底部に径1.2cm程の穿孔がみられる為、甕として使用されたものであろう。胴下部外面には板ナデがみられ、底部直上にはナデ調整、内面にはナデ、押圧調整が行われる。胎土は底部上り5.2cm程のところで白色砂粒の含有量に大きな差がみられる。色調は明赤褐色、焼成は良好である。この他埋土中から後期前半の袋状口縁壺、鉢口縁片が出土している。

#### 14号住居跡 (図版12, 第22図)

13号住居跡を切って掘られた住居跡で15号住居跡にその両側を切られる。方形あるいは長方形プランの住居跡であろうが調査区の制約上明らかにできなかった。北側壁面に北向きの突出部が調査区東端にかかって検出されている。

床面上から弥生中期後半～後期前葉の土器片が出土している。

#### 13号住居跡 (図版12, 第22図)

調査区西端にかかる住居で北は8号住居跡に切られ、内部は14, 15, 16, 17号住居跡と複雑に切り合うが、これらの住居跡中で16号住居跡に継いで古い住居跡である。平面プランは方形あるいは長方形を呈するものであるが西側壁は中央でゆるやかなくの字状に外弯する。主柱の配置は明らかにできなかった。

床面から弥生中期後半の土器が出土した。

#### 出土土器 (第23図)

図示した三片はいずれも甕である。

1は復元口径25cm。胴部はややふくらみをもち口縁部は逆L字状に成形されている。口縁下には鈍い三角突帯をつまみ出している。口縁上面にはヨコハケの後ヨコナデで仕上げている。胴部内面上方には接合痕が

### 出土土器 (第24図)

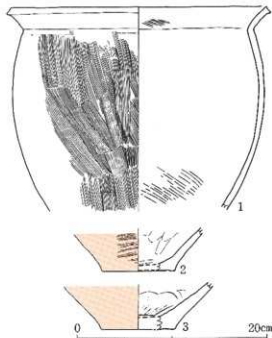
1は後期前葉壺上半部。2, 3は中期後半の壺底部である。

1は復元口縁径26.8cm, 胴部最大径26.5cmを計る中形甕である。胴部最大径は胴中位よりやや上方にあり, ゆるやかに内弯して口頸部にいたる。口頸部はくの字状にきつく外反して口唇部に向かい, 口唇部は断面コの字状で凹面をなす。外面はクテハケ, 内面下部にはナナメハケを施した後ヨコナデを行った痕跡がみられる。胎土は大粒の長石粒を含む粗い粘土を使っており, 色調は暗茶褐色で焼成は良好である。

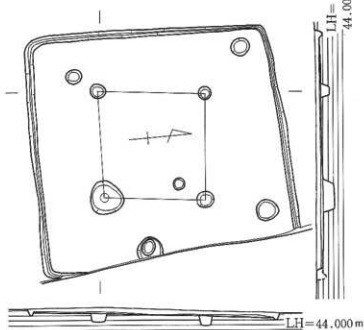
2, 3は丹塗研磨を施した壺底部である。2内面はナデ押圧, 3には板状工具による調整痕が残る。ともに白色石粒を多く含み, 色調は2が明褐色, 3が淡黄褐色で, 焼成は良好である。いずれの底面にも黒斑が観察された。

### 15号住居跡

13, 14号住居跡に切り込む住居跡で主軸を東西にとるものと考えられる。住居西側は幅1.5m程の一段高いテラス面が削り出されており, 南東隅には土壇Pitが密集する。西側壁中央にはコの字状の住居内への突出部が削り出される。



第24図 14号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第25図 16号住居跡実測図 (1/60)

埋土中からは、弥生中期後半土器片等が出土している。

#### 16号住居跡（図版12，第25図）

15，17号住居跡，2，3号住居跡を切って掘り込まれた住居跡で，平面は方形プランを呈する。東西3.8m，南北4.1mを計り，四辺とも周溝がめぐっている。4本主柱の住居であるが，住居のプランからやや東よりに主軸がずれて掘られている。東西南北とも柱間は1.7m程である。

住居の残存状態はすこぶる悪く，現地表から床面までの深さは10cm程であるため，出土土器も埋土中より，弥生土器片が若干出土した程度である。

#### 17号住居跡（図版12，第22図）

調査区東端にかかり，南西コーナー付近がわずかに確認された住居跡である。15，16号住居跡に切られており，詳細は定かではない。平面プランは方形あるいは長方形であろうか。

#### 18号住居跡（図版13，14，15，第26，27図）

溝5を切って掘られた住居跡で，2，8号住居跡等と主軸を同じくしているが，平面プランは南北4.20m，東西4.35mと他に比べてやや小さい長方形を呈す。床東側に8cm程の高さのテラスがみられるが，これは住居の拡張を行った際の新しい床面の高さを示しており，拡張前の住居のプランは図中破線で示した東西2.70m，南北3.00mに復元することができる。拡張以前の住居では主柱穴は検出されなかったが，拡張後では明瞭な4本の主柱をもち，柱間は東西に長い。

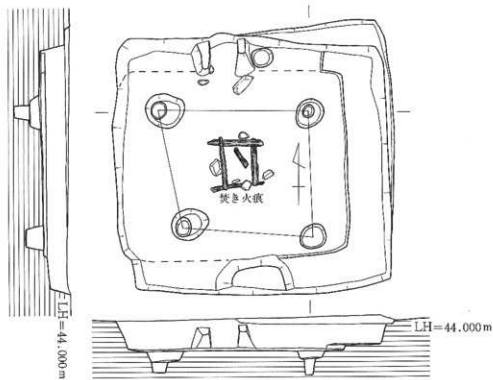
住居南壁中央には高さ35cmの黄褐色粘土を用いた階段状の土盛りが行なわれており，通用口にステップを設けたものと思われる。北壁中央やや西寄りには黄色粘土を固めたカマドが築かれていた。カマド内吹き出し口には炭化物，灰，焼土が重複して堆積しており，その中央には支脚に用いたと思われる柱石が直立していた。北側壁はU字状に外に向けて傾斜をつけて掘り込まれており，煙道の一部になっていたものと思われる。カマド内，および周縁に礫石が散在するが，カマドを廃棄する際に何らかの祭祀行為が行なわれたことを想定させる状況は8号住居跡のカマドの検出状況に類似する。

住居中央床面上で井の字状に木材を組んで火を焚いた痕跡がみられ，その灰土中から土師器碗が数個出土し，他に床面から須恵器杯蓋，盤，甕，土師器瓶，碗等が出土した。

#### 出土土器（図版37，第28図）

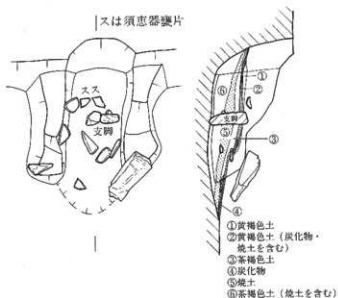
8，9は埋土，11は拡張以前の住居床面出土，他は拡張後の床面出土の土器である。

1は杯蓋で口縁径12.2cm，器高4.6cmを計る。口縁部は若干外反した後には内弯して口唇部にいたり，口唇部は内傾する凹面となる。稜は比較的小さく垂ぎみで，天井部は平端ぎみである。天井部外面には回転ヘラケズリ，内面の一部に不定方向ナデがみられる他は回転ヨコナデ調整である。胎土には白色砂粒を多く含み，色は淡青灰色を呈し，焼成は堅緻である。2は皿片で，復元口縁径15.4cm，器高4.1cmを計る。体部はゆるやかに内弯しながら外傾して断面コの字形の口唇部にいたる。内外面ともヨオナデの後，手持ちナデで仕上げられており，外面には指押

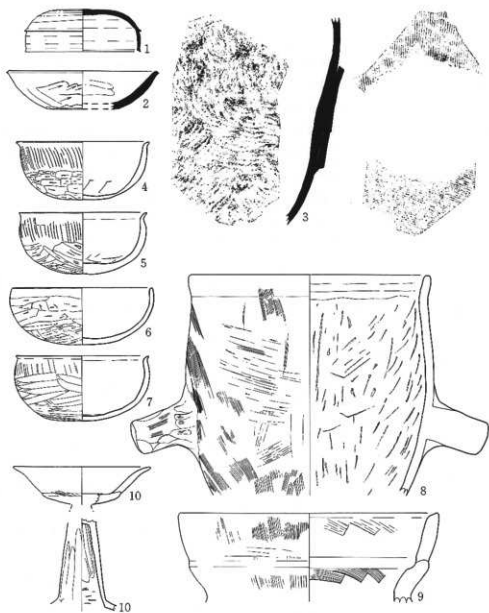


第 26 図 18号住居跡実測図 (1/60)

圧痕がみられる。胎土は白色砂粒を含む良質の粘土で、色調は暗黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。3は鍔銅部片で外面には焼成の際に溶着した他の甕の破片が残っている。外面上半にはタテ平行、下半にはヨコ平行のタタキが行われており、内面には同心円タタキの後ナデ消しが施されている。胎土には大粒の白色砂粒を含んでおり、色調は淡黒灰色で外面の上半部には灰をかぶる。焼成は堅緻である。



第 27 図 18号住居跡カマド実測図 (1/25)



第 28 図 18号住居跡出土土器実測図 (1/4)

4～7は土師器碗で6以外はいずれも口唇部下でやや内傾した後に口唇部を上外方へつまみ上げ、端部を丸くおさめる形態のものである。調整も外面はタテハケを施し、器面を整えた後に胴下半から底部にかけて手持ちヘラケズリで仕上げている。7には胴中央部に工具によるナデ

が施されている。これらはどれも、赤色斑粒、雲母片を含んだ良質の粘土を使用しており、色は4が赤茶色、5は淡赤褐色、7が淡黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。6は口唇部が内湾して端部を丸くおさめるもので、外面は口縁部以外は全て手持ちケズリ、口縁部と内面にはナデ調整を行っている。内面底部には布圧痕が観察された。胎土は赤色斑粒、雲母細片を含み、色は淡橙褐色で、焼成は良好。8は甌である。復元口縁径は25cm、胴部最大径は26.3cmを計る。口縁部はゆるくくの字状に外反して端部をまるくおさめる。把手は断面円形でやや下向きにとりつけられている。外面は細いタテハケ調整を行った後ナデ消しており、上部には一部ケズリもみられる。内面は丁寧なタテケズリが施されている。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げている。胎土には大粒の白色砂粒を多く含む粗い粘土で、色は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。10は大形二重口縁空の口頸部片である。復元口縁径27.2cm。口縁立ちあがり屈曲は鈍くまるみをもち、内湾ぎみに立ちあがる。外面はタテハケの後ヨコナデ、内面にはナメハケの後ヨコナデを施しナデ消す。胎土には粗い粘土を使用しており、色調は暗黄褐色で焼成は良好である。

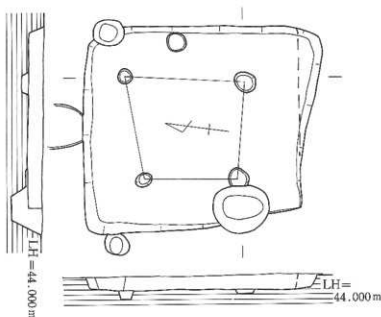
10, 11は11号住居跡の流れ込みと考えられる。いずれも高杯で、10は口縁径14.2cmに復元される。胎土には白色砂粒を含む良質の粘土を使用し、色は淡赤褐色、焼成は良好である。11は大形に属し、脚柱にはタテ研磨が施される。胎土は精良で、色調は淡赤褐色、焼成も良い。

#### 19号住居跡 (図版16, 第29図)

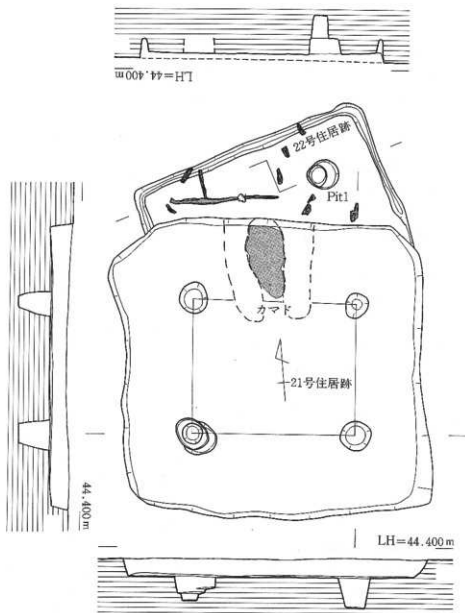
18号住居跡の南西に位置する方形プランの住居跡である、プランは若干南北に長く、南側の東西幅がやや狭い。主柱は4本で柱間は1.5m前後を計る。南北主軸方位はN-5°-Wである。側壁下に周溝等は認められなかった。住居南西壁にかかって14号土壇が新たに掘り込まれていた。埋土中から弥生中期後半～後期初頭土器片が出土している。

#### 20号住居跡

調査区中央東隅に南西隅のみ検出した。概報では住居跡として報告したが、現在のところ特定することは控えておきたい。



第 29 図 19号住居跡実測図 (1/60)



第 30 図 21、22号住居跡実測図 (1/60)

**21号住居跡 (第30図)**

北側調査区南端で22号住居跡を切って建てられた住居跡である。やや不整な方形プランをしており、南北長4.76m、東西幅は中央で4.64mを計る。支柱は4本で柱間は南北に2.1m、東西で2.6mで、東西方向にやや広い。南北軸はN-12°-Eをさす。



住居跡北側壁中央に赤変硬化した焼土塊と炭化物が集中して検出し、その東西側に黄色粘土がブロック状に散乱していた。カマド跡であると思われるが周辺にまで黄色粘土や焼土が幾分か散乱していたため、住居が放棄された際に意図的に破壊された可能性が高い。

住居内四周から周溝等は認められなかった。カマド焼土内から図示した土師器甕、中形壺等が出土している。

#### 出土土器 (第31図)

1は甕片で胴中央部、および把手を欠失している。復元口縁径25.3cm、器高は25.3cm前後であろう。底部はやや下方にふくらむ平底で中央に円孔、周囲に4個の楕円形孔を配すと堆定される。胴部は上外方へゆるく内弯しながら外傾しており、口唇部は

まるくおさめている。胴外面は粗いタテハケ、内面下半はタテ上方へのケズリ、上部にはケズリの後にタテハケが行われており、口縁部はヨコナデ調整を施している。胎土は白色小砂粒を含むやや粗い粘土で、色調は明赤褐色で焼成は良好である。2は広口壺上部片で口縁径11.5cmを計る。胴部外面は粗いタテハケの後ナデ消しを行い、内面はヨコケズリを施す。口頸部はヨコナデで仕上げているが整形が粗い。口唇部は外傾する平端面をもつがやや丸みをおびる。胎土は白色砂粒を若干含む良質の粘土を用い、色調は暗茶褐色を呈しており、焼成は良好である。外面に煤が付着している。この他に甕別個体片、甕口縁片等も出土している。

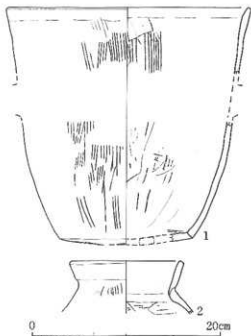
#### 22号住居跡 (図版17, 第30図)

21号住居跡に南側の大半を削られる方形プランの住居跡で、北壁から推測される南北主軸はN-17-Wを計る。4本主柱であると考えられるが、現況で確認できたのは北側2本のみであり、東西柱間は2.1mを計る。現存する三方側壁下には周溝が確認された。

床面から図示した土師器が出土した他、焼木が散乱しておりPit1からは土製勾玉が出土している。

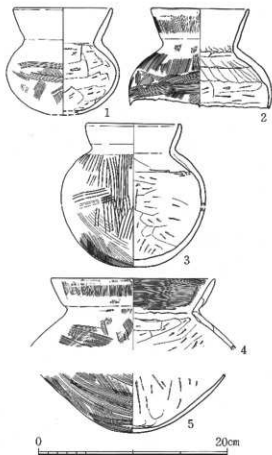
#### 出土土器 (図版34, 第32図)

1~3は中形壺である。1は口縁径10.3cm、器高11.3cm、胴部はやや扁平な球形で、口頸部はくの字に屈曲し、内弯しながら外傾する。口唇部は丸くおさめている。胴外面はタテハケの



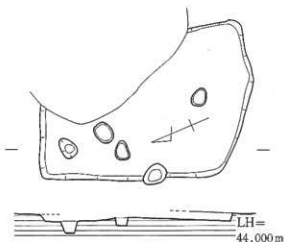
第 31 図 21号住居跡出土土器実測図 (1/4)

後、肩部にはヨコハケが加わり、内面はヘラケズリを施す。胎土は良質の粘土で、色は淡暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。2は胴下半部を打ち欠いており、口唇部が摩耗していることから、器台に転用していたものと考えられる。胴部は球形状に復元することができ、口頸部は鋭く屈曲した後、直線的に外傾する。外面はタテハケを基調とし、肩部下にヨコハケが一条廻る。胴内面下半にはヨコケズリを行った後に粘土帯を接合し押圧調整で仕上げるが、接合痕が明瞭に残る。胎土は白色砂粒を含む精緻な粘土を使用しており、色調は濃赤褐色で、焼成は堅緻である。3は球形の胴部からやや鈍く屈曲して内弯しながら外傾する。胴下部には細いハケ、中央以上は粗いタテハケを施し、内面はヨコケズリを施す。胎土は白色小砂粒を含む良質の粘土を用いており、色は暗茶褐色、焼成は良好である。



第 32 図 22号住居跡出土土器実測図 (1/4)

4、5は甕である。口頸部は内弯ぎみに外傾する。胴外面はタテハケの後に肩部にヨコハケを施し、内面にはケズリを行い、口頸部にはヨコハケを施す。胎土はやや粗い粘土を用い、色は暗茶褐色で、焼成は良好である。5は底部で、内底部は指押圧が施されており、それより上にはケズリが行われる。外面はタテハケを施している。胎土は大粒の砂粒を含む粗い粘土で、色は暗茶褐色で、焼成は良好である。



第 33 図 23号住居跡実測図 (1/60)

### 23号住居跡 (第31図)

6号石棺墓に北東部を切られる長方形プランの住居跡で、N-23°-Eに主軸を向ける。現況で南北長3.4m幅2.4m弱を計る。主柱を特定することはできなかった。

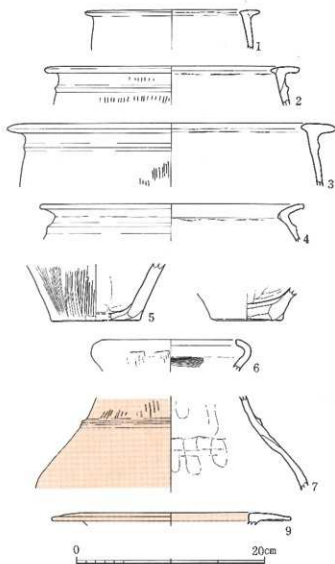
床面よりやや浮いた状態で図示した弥生中期後半の土器が出土している。

### 出土土器 (第34図)

1~6は甕、7、8は袋状口縁壺、9は高杯でいずれも破片であるため、口縁径は図上で復元している。

1~3は径こそ違いが逆L字口縁をなし、胴部がややふくらむ同様の形態を示す。1は口縁径16.8cmで、内外面ともナデ仕上げを行う。胎土は角閃石、長石粒を含む良質の粒土を用いており、色は褐色で、焼成も良い。2は口縁径24cm、口縁下に一条の鈍い三角突帯をめぐらす。外面はタテハケ、内面はナデ仕上げを行っている。胎土は角閃石粒を多く含む精良な粘土を使用し、色調は明赤褐色で、焼成も良好である。4は口縁部がくの字状に屈曲した後ゆるく屈曲し、口縁部下に低い三角突帯をめぐらす。胎土は長石、角閃石粒を含む良質の粒土で、色は暗黄褐色、焼成は良好である。5は直線的に伸び、6は外に開いてふくらむ胴部をもつ。6は底部下面が若干上げ底ぎみである。

7、8ともに頸部がさげられられないタイプの袋状口縁壺である。7は頸外面をタテ方向の工具によるナデを行い、内面にはヨコハケを施している。8は、外面に丹塗り、頸部にはタテ方



第 34 図 23号住居跡出土土器実測図 (1/4)

向の研磨が暗文状に施される。7の口縁径は14.3cmである。ともに雲母細片を含む精緻な粘土を使用しており、色調は淡桃褐色で、焼成も良好である。

9は口縁径18.8cm、鋤状口縁をなし、端部は先細りする。内外面とも丹が塗布されているが、研磨の状態は定かではない。胎土は精良な粘土を用いており、色は淡黄褐色で、焼成も良好である。

24号住居跡 (図版17, 第35図)

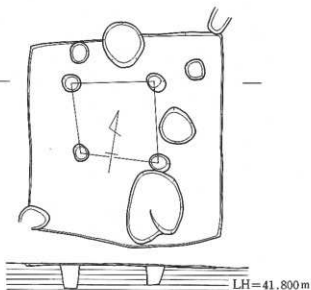
8, 9号石棺墓の東に位置する住居跡で平面は方形プランをもつ。南北3.4cm, 東西3.2cmを計り、支柱は4本でやや北寄りに組まれている。遺構の残存状況が悪く、側壁の立ちあがりかわずかに残る程度である。

#### 小 結

24棟の住居跡の時期は弥生中期後葉から古墳時代中期後半に及ぶ。最も古いのは13, 19, 23, 24号住居跡で、いずれも小規模の方形プランを有しており、周溝を掘削していない。それに続くのが4, 14号住居跡で後期中葉にかかるものである。しかし、この時期までの検出した住居跡の数は住居跡総数からみると少数である。ところが①弥生期の住居跡は現地表からさ程深くないレベルで床面にいたる。②後世に掘削された遺構埋土中から出土した弥生土器の量が相当量にのぼる。③柱穴内から出土する土器の大半が弥生中期後半～後期中葉である。以上の状況から類推して、当地には弥生中期後半から後期中葉にかけての集落が営まれていたが、それが廃絶した後は直ちに遺跡破壊の対象となり、とりわけ古墳時代中期には当地が大幅に地下げされた形跡が認められるため、弥生期の集落遺構の大半が消失してしまったものと思われる。

弥生後期後半から古墳前期前葉にかけては当地が集団墓地の一角として利用されたために居住空間からオミットされており、次代再び居住地としたのは6, 7, 9, 12号住居跡の住人達である。9号住居跡床面からは布留式甕、高杯等が出土しており、最も新しい1号石棺墓の時期にはほぼ等しい。その後11, 17, 21号等の住居跡が営まれた後、22号, 2, 8, 18号, そして10号住居跡と変遷をたどる。

8, 18, 22号住居跡には北壁にカマドを設けており、この3棟の住居跡のなかで床面付近か



第 35 図 24号住居跡実測図 (1/60)

ら須恵器を出土しなかったのは22号住居跡であり、最も古いカマド設置住居跡となる。現在井原、三雲遺跡群で確実にカマドを伴った住居跡で最も古いのは三雲中川屋敷Ⅰ-12の3号住居跡であり、また22号住居跡出土の甎の形態は三雲八龍Ⅰ-18の1号住居跡出土例に類似することから、これらの住居跡と時間的併行関係をもつものと考えられる。

8、18号住居跡出土の土器群はその出土状況からみて一括性の強い5世紀中葉の日常雑器として好資料である。伴出の須恵器は陶色TK-208型式にほぼ併行するものとみて良いだろう。

## 墳 墓

本調査地点で確認された墳墓は計19基であり、その半数近くの9基を石棺墓が占めており、次に7基の木棺墓、2基の石蓋土壇と続く。

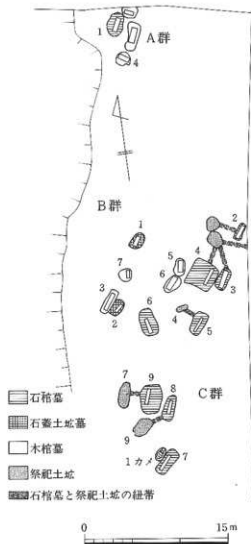
調査区内での墓群は大きく三つに分けることができる。

A群——調査区北端に位置する。石棺墓1基と、それを囲むように2基の小児木棺と成人木棺1基の埋葬を確認している。1号棺墓の棺外に布置古式併行の壺、甎片が供献、廃棄されており、3群中で最も新しく形成された墓群である。

B群——辺12mほどの不正方形の墓域のなかで形成された墓群で、三群中最高所を占める。東に石棺墓、西に石蓋土壇墓と木棺墓が分離して配置されており、石棺墓に伴うとみられる祭祀土壇を3基確認している。

C群——最も南に位置し、3基の成人石棺と1基の甎棺墓で構成され、その主軸の違いから2対の小群に細分することができる。

B群は弥生後期末から古墳前期初頭にかけて、C群は弥生後期末に形成された墓群であろう。



第 36 図 井原上学遺跡における墓群の配列

## 甕棺墓 (図版21, 第37図)

本調査区 (埋葬状態) において発見された甕棺墓は1基で、1号甕棺墓とした。

1号甕棺墓は、調査区中央やや北よりの21号住居跡の床面下で検出した合わせ口式の甕棺墓で7号石棺墓と併置された状態で埋葬されていた。21号住居跡構築に伴う地下げの際に墓墳上面および甕棺上下とも上半部が破壊されていたようで残存状態はきわめて悪く、特に上甕として使用された広口壺は底部まで欠失しており、また下甕東縁には住居跡の主柱穴が掘り込まれていた。

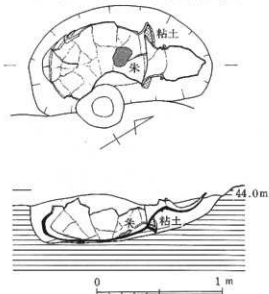
甕棺墓は主軸をN-31°-Eにとっており、垂直線からの傾斜度は7°を計る。上甕の口径が小さいため、合わせ部は下甕の口縁下方くびれ部までつめられており、その周縁には黄色粘土の充填が行われていた。

棺内に人骨は残存していなかったが、下甕底面から朱塊が検出されている。

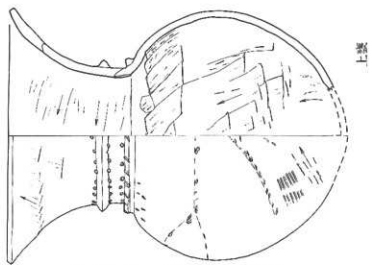
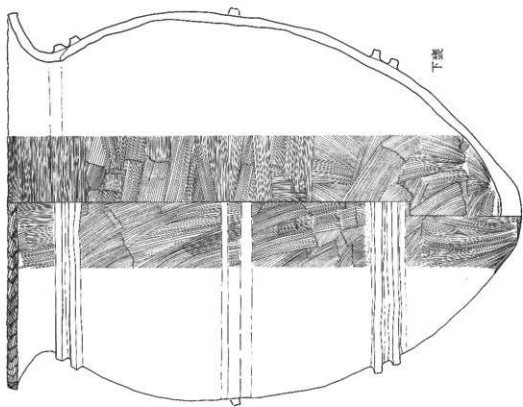
使用された土器の特徴から弥生時代後期終末の甕棺墓であろう。なお、7号石棺墓の埋葬時期との先後関係については、石棺墓掘り方が、甕棺墓東縁部を切っていることから、当甕棺墓が7号石棺墓に先立って埋葬されたようである。

### 土器 (図版38, 第38図)

上甕には大形の広口壺が使用されていた。底部が破壊されており、その形態は判然としなが、胴部の湾曲の具合いからみて丸底、あるいは尖底丸底になるものと思われる。胴部はほぼ球形を呈し、頸部はらっぱ状に上外方へ開き口縁部下で若干肥厚し丸みを残す断面コ字形の口唇部に続く。復元口径39.4cm、器高は53cm程であろうか。表面胴下半部には右上がりの粗いタタキの後、同方向へのケズリ調整がみられ、上半部にはナデ調整。胴上部には二段の葡萄列点文がめぐっている。頸下部には二条の肉厚な三角突帯がめぐり下段には刻み目が、上段には突帯の上下に、竹管文が施されている。頸上部では右上がりの板ナデ調整が行なわれている。内面胴部は左上がりのケズリ、頸部では左方向へのケズリが施されているがいずれも軽いものである。なお、胴部に縄目圧痕が三方向にわたって確認された。焼成以前の土器運搬時等にスタンプされたものであろうか。胎土



第37図 1号甕棺墓実測図 (1/30)



第 38 图 1号葬棺夹测图 (1/6)

には精良な粘土が用いられており、色調は暗赤褐色、焼成は堅緻である。

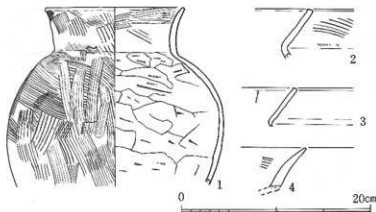
下甕は復元口径58.6cm、胴部最大径61.3cm、器高81cmを計る。いわゆる砲弾形の甕棺で底部は平底の形態を保つものの、丸底の傾向が強いものといえる。内外面ともクテないしヨコハケを最終調整としており、胴部外面には断面台形二条一組の突帯がほぼ等間隔に三対めぐっている。口唇部は断面コの字形で上下からくの字形に刻み目が施されている。胎土は粗い白色砂粒を含むが基本的には精良な粘土を使用しており、色調は淡暗赤褐色で、焼成は良好であるが、ややもろい、前述のようにこの土器の一部は調査区西側段丘斜面に推積する第三層黒褐色土土器包含層から出土している。

## 石 棺 墓

調査区域内で発見された石棺墓は9基で、調査区の南西から北東方向へ続く2～9号石棺墓群と単独に立地する1号石棺墓群に大別される。6号石棺墓が北向きの主軸をとるのを例外としていずれも、北北東方向へ主軸を向けることを特徴としている。

### 1号石棺墓 (図版18, 第40図)

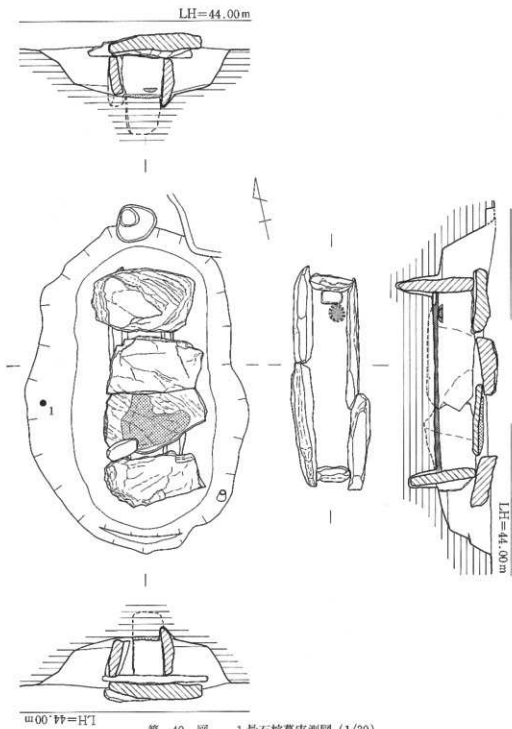
調査区北西部段丘斜面際で4号住居跡を切って掘り込まれた箱式石棺墓である。墓壇は、長さ2.60m、幅約1.6mを計り、概ね長楕円形状を呈す。4号住居跡を切ってそのほぼ中心西寄りに掘り込まれていて、蓋石等は埋納頭初の現況を保っていた。蓋石は4枚の板石を用いており、両側壁に各2枚の長方形、厚手の板石、両小口に各1枚の板石によって組み合わせている。床面には黄褐色粘土の張り床が、厚さ2～3cm程に敷かれていた。組み合わせは両小口石を側壁で挟む形をとっている。側壁および小口は石材に合わせて墓壇を掘り下げ、上面を描えている。棺身の主軸方位はN-11°20'-Eで、側壁は若干外傾しており、棺内床面において長さ1.4



m、幅0.33mを計り、頭位は北側に枕状の長方形板石が置かれていること、南に比べ棺内幅がやや広めに側石が配されていることなどから、北側に向けられていたものと思われる。棺内北東隅に副葬されていたとみられる木

第 39 図 1号石棺墓出土土器実測図 (1/4) 製碗の痕跡として漆皮





第 40 图 1 号石棺墓平面图 (1/30)

LH=44.00m

裏を確認している。棺外西の2次墓壕掘り方で棺外供献されたものとみられる布留式古式の広口壺が出土した他に、埋土中から弥生中期後半土器片が多量に出土しているが、それらは4号住居跡の埋土に伴うものと思われる。

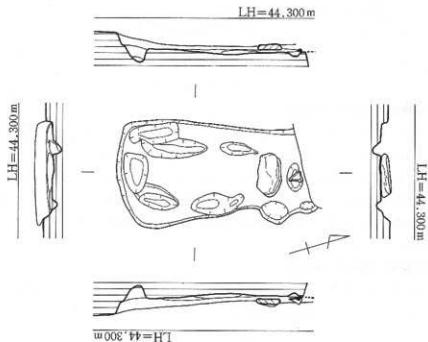
#### 出土土器（図版39，第39図）

1は棺外供献された広口壺，2～4は埋土中に混入していた小片である。

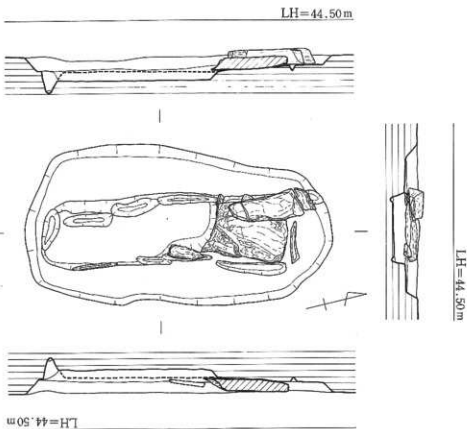
1は胴下部及び上半部の半分を後世の削平によって欠失している。口縁径14.3cm，胴部最大径22.8cm，胴部最大径は胴中位よりやや上にあり若干肩が張り出しぎみである。口頸部はほぼ直立し口縁下で少し外反しており，口唇部は外に多少尖りぎみではあるが丸くおさめている。

外面は粗いタテハケで仕上げられており，内面胴部はヨコケズリ，口頸部にはヨコハケを施したあと軽くナデ消す。胎土は角閃石粒・赤色斑粒を多く含むやや粗い粘土を用いており，色は淡茶褐色で，焼成は良好である。

2，3は口縁部片で径を復元するまでにはいたらなかった。いずれも口縁部はまっすぐに上外方へ伸び，口唇部は内側に鈍くつまみ出す。3の内面はヨコハケの後ナデ消しが行われている。4は高杯口唇部片である。口縁部は多少外反し口唇部はまるくおさめており，内面にはナデ調整が行なわれているが，ヨコハケの痕跡がかすかに残る。



第 41 図 2号石棺墓実測図 (1/30)



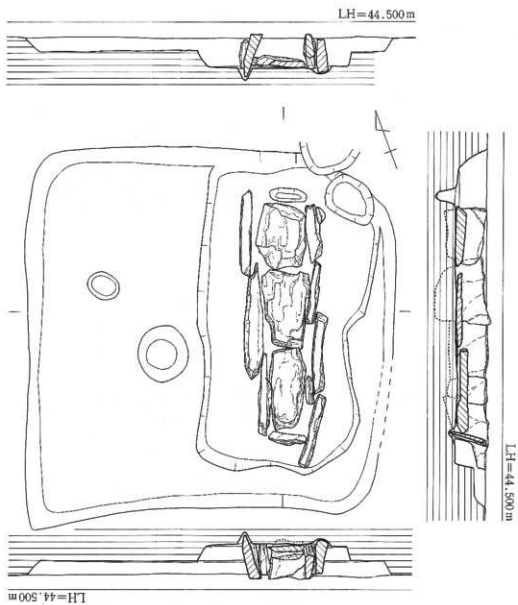
第 42 図 3号石棺墓実測図(1/30)

### 2号石棺墓(図版19, 第41図)

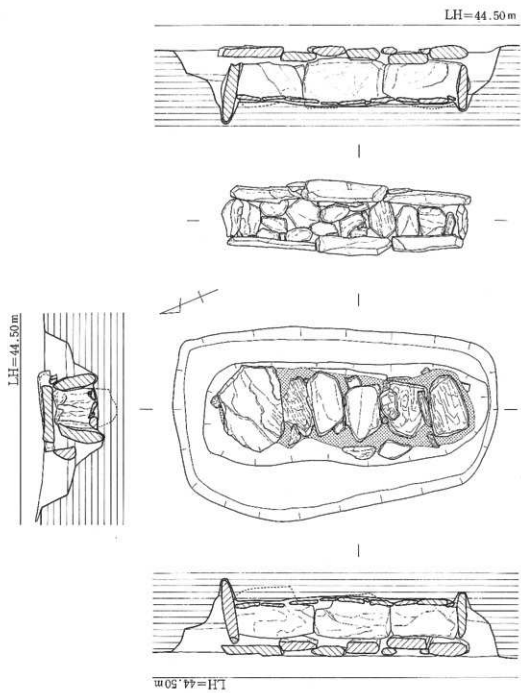
調査区中央東隅に位置する箱式石棺墓で、2号祭祀土壌の東に位置する。墓塚北側を16号住居跡に切られてはいいるが、平面プランは不正長方形で墓塚全長約1.65m、南側最大幅0.86mを計る。上面の削平の際に石棺材は完全に引き抜かれており、わずかに北端に石棺板破片と、その南に石枕状の長楕円形の板石が残されるのみである。棺身主軸はN-17°Eでこれもおそらく頭位を北側にむけるものであろう。棺身内法量は全長が1.1m前後、幅0.36mほどであろう。小児用棺であったと思われる。

### 3号石棺墓(図版19, 第42図)

2号石棺墓の南に位置し、4号石棺墓の東に並置する箱式石棺墓である。墓塚は全長2.44m幅1.32mで、平面プランは隅丸長方形を呈している。3号石棺墓と同じく地表の削平が著しく棺材の大半が既に抜き取られており、わずかに北床石が元位置を保っていたにすぎない。棺内主軸方位はN-12°50'Eで棺内法量は全長約1.85m、幅約0.40m。棺幅が北側に広がることから頭位は北側に向けられるものとみられる。成人用棺であろう。



第 43 图 4 号石棺墓平面图 (1/30)



第 44 图 5 号石棺墓实测图 (1/30)

#### 4号石棺墓（図版19，第43回）

3号石棺墓に並置し、5・6号木棺墓と前記石棺墓に挟まれる成人用棺である。蓋石は削平を受け、全て除去されていた。

墓域はほぼ隅丸正方形の平面プランを有し、南北長3.03m、東西幅2.93mを計る。石棺は墓域の東側端に長さ2.5m、幅1.4mの2次墓域を掘って石棺を埋置する。西側テラスに大小の柱穴がみられるがいずれも石棺墓が形成された後世のものである。

石棺は主軸をN-21°50' - E方向に向けるもので北側小口石は抜き取られているが棺内法量は主軸長1.85m、幅0.4m程棺内の高さは20~30cm程であったと推測されるであろう。東側壁として板石2枚、西側壁として板石4枚が組み合わせて使用されており、いずれも片岩質の石材で上方にむかって内傾するものであった。小口石は側壁に明瞭に挟み込まれているのではなく、東側壁は南に、西側壁は北にずれるため小口の一部が側壁内にとり込まれているにすぎない。床石もやはり片岩質の石材が使用されていたが、粗悪な板石であった。

床石の右幅、側壁の壁幅が、北に向けて幅広にすえられていることから、被葬者の頭位は北であったと思われる。3号祭祀土壇の祭祀対象石棺墓の第1候補である。

#### 5号石棺墓（図版20，第44回）

4号石棺墓のほぼ南2.2mに位置する成人用棺で、石棺はほぼ完全な状態で検出している。

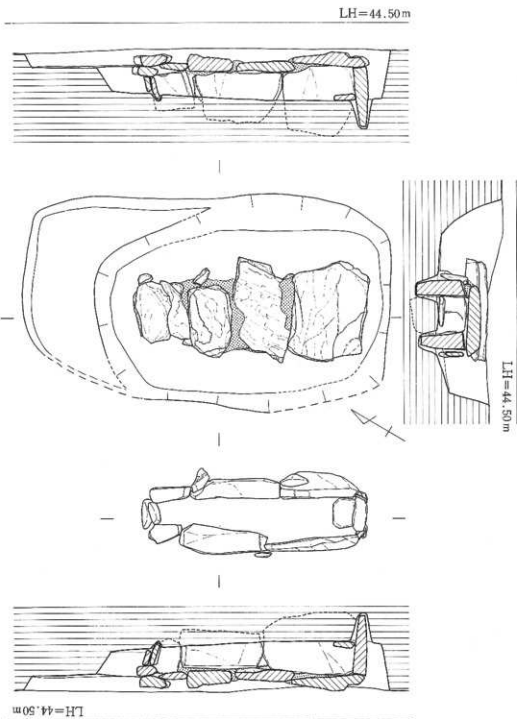
墓域は2段掘りを行っており、1次墓域はやや西にふくれぎみの隅丸長方形のプランをもち全長2.58m、幅1.47m、現深さ0.33mを計る。2次墓域1次墓域のほぼ中央は石棺を埋置する掘り方として掘られており、全長さ2.24m、幅約0.60m、深さ10~20cm程の隅丸長方形を呈す。

石棺は主軸をN-24°50' - E方向に向いており、天井部に6枚の板石を置き蓋石としている。北端の蓋石材が他の5枚の材に比して異状に大きくすき間部には小板石と黄色粘土によって丁寧に目詰めが施されていた。側壁は東西に各3枚の花崗岩結晶片岩製の板石を加工して使用しており、小口石は圓石によってうまく挟み込まれている。北側小口石の掘り方が最も深い。床には薄く小さめの板石が敷きつめられており、棺内には朱が塗布されていた。棺内法量は主軸長1.76m、幅0.40m、高さ0.42m程である。やや幅広の北側に頭位が向けられていたものとみられる。

なお、5号石棺墓埋土から、4号祭祀土壇出土高杯3の口縁部の一部が出土しており、出土土器を接合すると3は完形に復することから、4号祭祀土壇は、5号石棺墓の葬送儀礼に関連する用品の廃棄土と考えるのが妥当であろう。

#### 6号石棺墓（図版21，第45回）

5号石棺墓の西側約3mに位置する成人用棺で、原形を保った状態で検出した。1次墓域は縦長隅丸長方形で全長2.92m、最大幅1.74m現地表からの深さは最深部で0.14m。2次墓域は1次墓域の南に寄って掘られている。



第 45 图 6号石棺墓实测图 (1/30)

蓋石は片石質の板石を使用しているが、北から南に順次大きくなるように並べられており、隙間には黄色粘土によって丁寧に目貼りされている。棺側石として東西各3枚ずつの厚い板石が用いられているが両側とも南側2枚は長いのに比べ、北側の1枚は短く、この板石によって棺の長さを調節した状況が窺われる。棺内法は主軸長1.62m、幅0.32m、高さ0.20~0.30m。棺主軸方向はN-32°-Wで、調査区石棺墓中唯一西側に主軸を向ける。棺幅は南に向け広がっており深さも南に向けて深くなり、枕石状の板石が南に位置していること等から、頭位は南向きであろう。

#### 7号石棺墓（図版21，第46図）

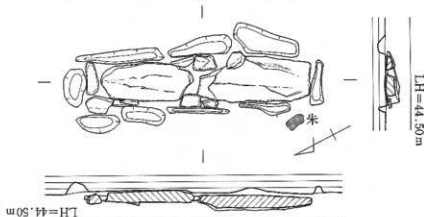
1号寝棺墓の東に並置され同寝棺墓と切り合う石棺墓で21号住居跡の掘削の際に棺材の大半を抜きとられており、残存状態はきわめて悪い。

石棺抜き取り痕を参考にすれば西側石は4枚、東側石は3枚で、東側石は厚めの板石を使用したことが窺われる。棺内法量は主軸長1.79m、幅0.40m。床石として長方形厚手の片岩質板石を2枚、隙間に小板石を敷きつめ棺床を整えていた。棺床北側には小板石を敷き棺長を整えており、床石の幅も南石が広いこと、また南西棺外に朱塊が検出されていることを考慮すると頭位は北向きか。

#### 8号石棺墓（図版24，第47図）

7号石棺墓のほぼ北側3mに位置する石棺墓で、9号石棺墓に並列的に並び、主軸方向もほぼ同一としている。墓壇間の距離は30cmほどである。墓壇は不正長楕円形で南端をビットに切られているが全長2.76m、幅1.21m、現地表からの深さ0.33mを計る。墓壇は1段掘りであった。

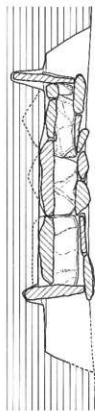
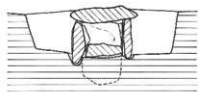
石棺は無傷で検出されており、蓋石はやや小ぶりの片岩質と花崗岩質の板石を7枚並べて棺を覆う。石棺側壁は東に4枚、西に3枚の板石を組み合わせており、小口石を両壁で挟む形をとっているが、北東の組み合わせ部は石材の長さが足りなかったのか柱状の石を立てかけてい



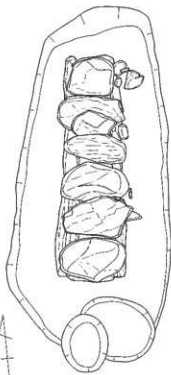
第 46 回 7号石棺墓実測図 (1/30)



LH=44.500m

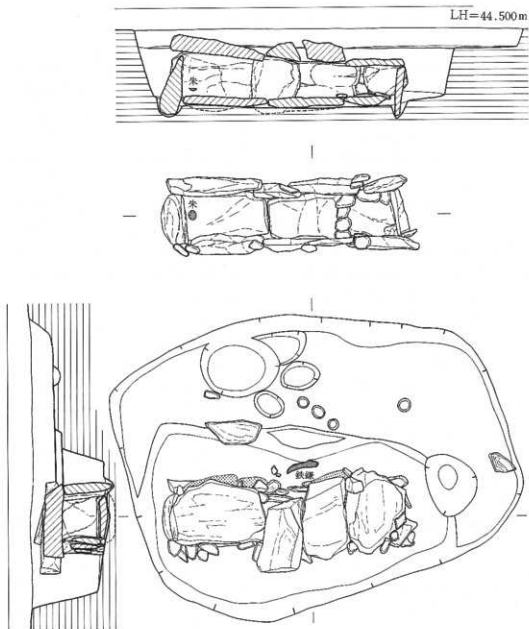


LH=44.500 m



LH=44.500 m

第 47 图 8 号遗址基址平面图 (1/30)



第 48 图 9号石棺墓实测图 (1/30)

るにすぎない。床石に2枚の長方形板石に加え北側に4枚の小板石を敷いて棺床を形成している。棺主軸方向はN-7°-Eで棺内法は主軸長1.60m、幅0.35m、高さ0.20mである。頭位は南向きであろう。

棺内側壁、小口石には全体に朱が塗布されていた。

9号祭祀土壌の祭祀行為対象石棺墓である可能性を有す。

#### 9号石棺墓（図版22, 23, 第48図）

8号石棺墓の東北東で9号石棺墓とその埋葬主軸をほぼ同一にもつ石棺墓である。第1次墓は不正隅丸長方形で、北側がやや幅広い。墓壇の規模は全長2.53m、幅1.52m、深さ0.17mを計る。石棺を埋置する2次墓壇は1次墓壇の北西隅に扁って掘り込まれており、現地表から墓壇底面までの深さは0.55mを計る。

棺材には、蓋石に3枚の結晶片岩と花崗岩を1枚用いており、北端蓋石は縦長に石棺を覆う。蓋隙間には小河原石と黄色粘土を用いて目貼りされており棺側石には主に結晶片岩が用いられており、東西に各4枚の板石と2枚の小口石を組み合わせて築かれており、その組み合わせは丁寧で、両サイド側石とも北側ほど棺の高さが高くなるようにレベルを合わせている。南北小口石とも側石に挟み込まれている。棺床には3枚の片岩質の板石が3枚すえられており、南側床石縁辺には拳大の板石が並べ置かれていた。棺内径量は主軸長1.70m、幅0.38m、高さ0.25~0.35mで、棺幅は北側で若干広くなる。石棺主軸方向はN-5°-Eである。

棺頭位は、棺幅・高さ・黒漆皮膜位置から判断すると北向きであろうか。

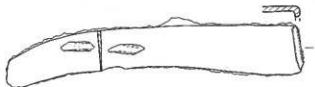
棺内北側には床面から若干浮いた状態で半球形碗状の黒漆の皮膜が検出されており、木製棺あるいは装飾用品の痕跡であると思われる。墓壇西側約0.85mに、7号祭祀土壌が当石棺墓とは主軸を同じくして掘られており、この祭祀土壌が9号石棺墓の祭祀行為に伴うと考えてよさそうである。なお、9号祭祀土壌はこの9号石棺墓に位置的な制約を受けながら掘られていることから、8号石棺墓は9号石棺墓に後続して築かれたものである。

棺外東側2次墓壇床面から鉄製鎌が刃部を棺側に向けて出土しており、棺外供献されたものと思われる。

棺内には床石を含めて全体に朱が塗布されていた。

#### 出土鉄器（図版39, 第49図）

出土した鉄鎌は折り返し部欠失する。全長26.3cm、刃幅は身中央で3.1cm、基部で3.6cm。刃の磨耗状況からみて木柄の装着部の径は2.7cmほどになるものと思われる。



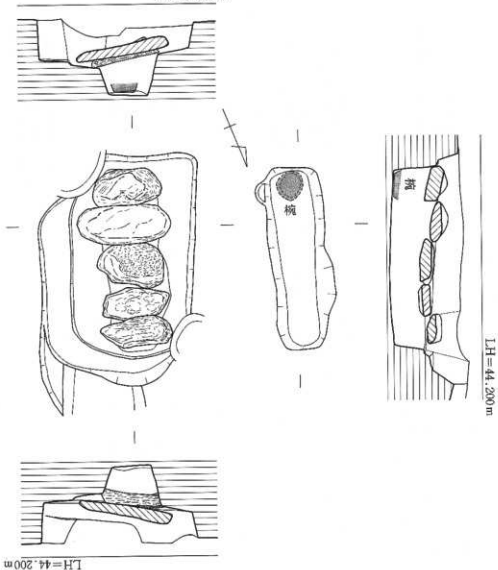
第 49 図 9号石棺墓出土鉄鎌実測図 (1/3)

## 石蓋土墳墓

### 1号石蓋土墳墓 (図版25, 第50図)

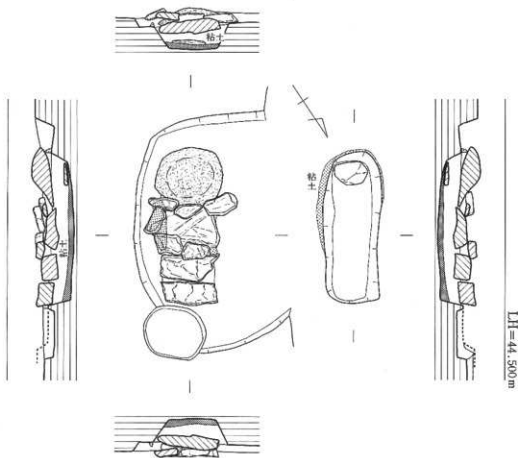
19号住居跡の西2mに、溝5を切り主軸をN-22°30'-Eに向けて掘られた土墳墓である。後世の柱穴等によって掘り方のプランは旧状を保っていないが、墓壇は2段掘りで、平面プランは不整隅丸長方形をなしており主軸長1.83m、幅1.21m、深さ15~30cmを計る。墓壇の西側に東に比べ一段低くなっており、天井がみな東に向けて傾斜していた。天井石は4枚が片麻岩で、

LH=44.200m



第 50 図 1号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

LH=44.500m



009'74=HT

第 51 図 2号石蓋土墳実測図 (1/30)

最も大きい長楕円形の板石が花崗岩質であった。主体部の内法は全長1.45m、幅0.48m、深さ0.27mで、南西隅付近と北東部が崩壊して幅広になっていた。主体部幅が南に向かって若干広がることから、被葬者の頭位は南に向いていたものと思われる。成人墓であろう。

なお、主体部南床上に漆の皮膜が碗状に残存していたが、木製容器を供献、あるいは枕状に置いていた痕跡であると思われる。

#### 2号石蓋土墳墓 (図版26, 第51図)

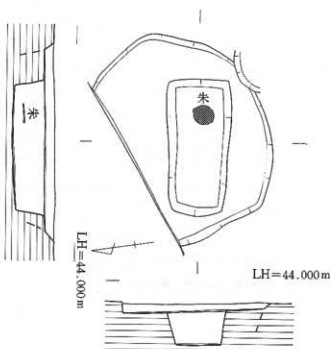
1号石蓋土墳墓南方約6mに位置するもので、3号木棺墓と並置されている。木棺墓との先後関係は判断しなかった。墓墳は不整な隅丸長方形を呈しており、北東部は後世の柱穴に

より切られている。天井石は砂岩と柱状の花崗岩を用いており、隙間には小石をつめたうえに黄色粘土によって目貼りまで行うといった丁寧な埋置を行っている。主体部は地表下12cmから掘り込まれており、主軸長1.21m、幅0.43m、深さ0.21mを計る。床面には黄色粘土が貼られており、南方には石枕が置かれていた。

### 木棺墓

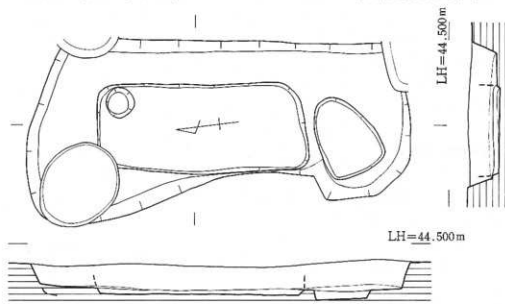
#### 1号木棺墓 (図版27, 第52図)

調査区北端、1号石棺墓を切って掘られた小児用棺で、平面プランは円形を呈する。棺は南寄りに主軸をN-82°-Wにとる。棺法量は主軸長1.08m、幅0.48m、深さ0.27mを計る。

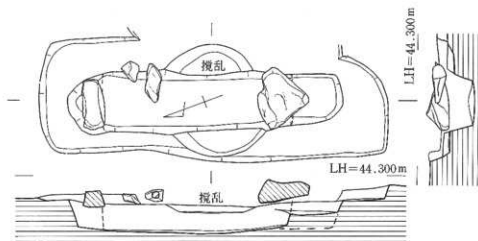


#### 2号木棺墓 (図版27, 第53図)

第 52 図 1号木棺墓実測図 (1/30)



第 53 図 2号木棺墓実測図 (1/30)



第 54 図 3号木棺墓実測図 (1/30)

1号石棺墓の南西に位置する棺の主軸を $N-7^{\circ}-E$ にとる成人棺である。棺は主軸長2.18m、幅0.48mを計る。頭位は明瞭ではない。

#### 3号木棺墓 (図版28, 第54図)

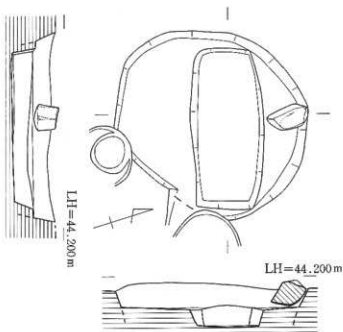
2号石蓋土墳墓と併設された墓で墓壇平面プランは長方形をなしている。墓壇は2段掘りで墓壇中心に円形攪乱がみられる。棺の上方には南北に大きな花崗岩塊外各1個ずつ残存しており、北東部にも2個の花崗岩塊が残っているが、標石棺上の置き石とするには墓壇埋土に埋も

れすぎている。中心の攪乱を考慮すると石蓋土壇と考えたほうが妥当であろうが、概報にならい応木棺墓として報ずる。主体部内法は主軸長2.18m、幅0.72m、深さ0.23mで成人棺であろう。

#### 4号木棺墓 (図版28)

1号石棺墓の南に位置する小児用棺である。墓壇は不整円形を呈しており、南側はやや角張る。

木棺は主軸を $N-73^{\circ}-E$ にとり、1号木棺墓と同じ方向に向く。棺の内法は主

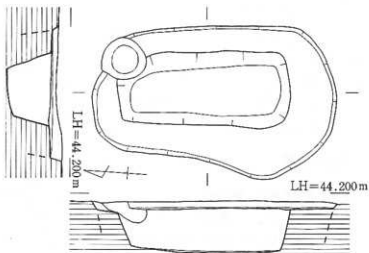


第 55 図 4号木棺墓実測図 (1/30)

軸長1.28m、幅0.58mで  
検出面からの深さは0.15  
m前後である。墓壇北側  
に花崗岩が埋もれていた  
が、標石であろうか。

#### 5号木棺墓 (第56図)

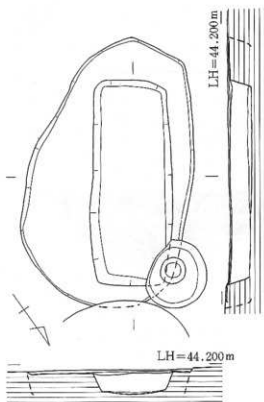
4号石棺墓に併置され  
る木棺墓で墓壇は不正隅  
丸長方形を呈し、その南  
端で6号木棺墓に接する。  
棺は、主軸を $N-4^{\circ}-E$   
にとり、棺内法量は1.37  
m、幅0.59m、深さ0.41  
mを計る。頭位を南に向  
ける成人棺である。



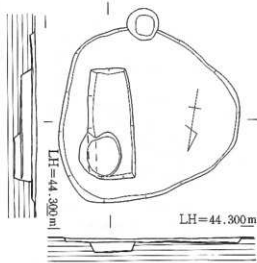
第 56 図 5号木棺墓実測図 (1/30)

#### 6号木棺墓 (第57図)

前述の5号木棺墓に北端を切られる木棺墓  
で、成人棺である。墓壇は不正楕円形を呈し  
ており棺は墓壇中央よりやや西寄りに埋置さ  
れていた。主軸は $N-22^{\circ}-E$ を向き、内法は  
主軸長1.64m、幅0.64mを計る。



第 57 図 6号木棺墓実測図 (1/30)



第 58 図 7号木棺墓実測図 (1/30)



## 土 墳

井原上学遺跡で調査した土墳は計15基で便宜上1～15号土墳としたが、2、3、4、7、9号土墳は、石棺墓あるいは木棺、甕棺墓の埋葬にともなう祭祀土墳、6、12、13、14号土墳は貯蔵穴と考えられ、その他に数基の用途不明瞭な土墳がみられた。

以下、個々の土墳についてその伴出遺物とともに概説する。

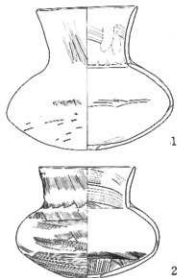
### 祭祀土墳

#### 2号土墳 (図版29, 第59図)

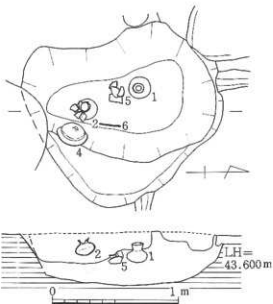
3号土墳に併置し、土墳南端を3号土墳に切られ北東部を16号住居跡に切られる祭祀土墳で、位置関係から2号石棺墓との祭祀関係との関連が想定される。

土墳の平面プランは不整台形で、主軸をN-26°-Wにとり主軸長1.5m、最大幅1.52mを計る。最深部までの深さは0.43mである。

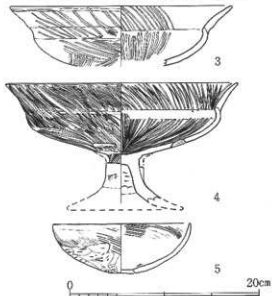
土墳埋土中より長頸壺、高杯、碗型土器



第 60 図 2号土墳出土土器実測図 (1/4)



第 59 図 2号土墳実測図 (1/30)



鉄銚等が出土しているが、投棄されたというよりは埋置された状態といえる。

#### 出土土器 (図版40, 第60図)

1, 2は長頸壺である。1は器高15.1cm, 口縁径10.6cm, 胴部最大径16.8cmを計る。底部には穿孔が見られ, その周縁にかすかに平底の痕跡を残す。胴部は扁平な球形を呈し下半部は直線的, 上半部は大きく内弯して頸部にいたる。胴部から頸部へはなだらかに移行し, そのまま直立する。口縁部下では若干外反して, 口唇部を尖りぎみに丸くおさめる。器表の剥落が著しく不鮮明ではあるが, 外面胴下半にはヨコケズリの後ナデ仕上げ, 上半部には細いタテハケ調整, 頸部にはタテ研磨の痕跡がみられる。内面胴下半部には軽いケズリの後板状工具によるナデ, 上半部にはナデが見られ, 頸部はナナメハケの後口縁部付近をナデ仕上げしている。胎土には白色砂粒を含む良好な粘土で色は暗赤褐色焼成は良好である。2は, 1よりひとまわり小型で器高11.9cm, 口縁径10.2cm, 胴部最大径15.2cm, 1と同じく底部が穿孔されており胴下半部はより直線的に上半部はより内弯して頸部にいたる。頸部は直立するが口縁部下において内弯ぎみに外傾する。器面調整は外面胴下半は一定方向への研磨が施されているが口縁部下にはヨコナテが行われている。内面胴下部にはタテハケ, 中央部にはナナメハケの後ヨコナテ, 上部にはヨコナテが行われている。頸部には粗いヨコハケがみられるが, 中縁部下は外面と同じくヨコナテがみられる。胎土は白色粒を含む良質の粘土で色は淡赤褐色, 焼成は良好である。

3, 4は高杯で, 3は杯部片, 4は脚裾部を除いてほぼ原形を知りうるものである。3は復元口縁径24.2cm。扁平な杯体部が内弯しながら直立し, 口縁部が逆に大きく外反する, 内外面ともヨコナテの後, 丁寧な研磨が暗文状に器表を覆う外面には若干タテハケ痕がみられる。胎土は白色砂粒, 白色透明砂粒を多く含む粘土で, 色調は明赤褐色, 焼成は堅緻である。4も3同様の杯部をもつが, 体部の広がりおよび立ち上がりは3に比べより直線的で, 口縁の立ち上がりもより上向きである。脚部は肉厚で, 杯部と接合後, その上から再び粘土を張りつけて接合部位の補強を行った痕跡がみられる。脚柱部は直立するが中途より脚裾部に向かって大きく屈曲外反している。杯外面の器面調整はナナメの細いハケ調整の後暗文状の連続的な研磨調整を行っているが, 3に比してその緻密さ, 丁寧さについて優れている。脚柱部外面はタテハケの後にヨコナテ調整が行われており, 内面にはヨコケズリが施されており, 裾部はヨコナテ仕上げか, 杯底部には内方からの穿孔が行われていた。胎土には白色透明砂粒を含むやや粗めの砂粒を含む粘土を用いており, 色調は濃赤褐色で内面はやや黄みを帯びている。焼成は堅緻である。なお, 口縁の一部に黒斑がみられる。

5は碗で前記4例と同じく底部穿孔が行われている。口縁径14.4cm, 器高5.4cm, 扁平な半



球形を呈す。外面下半部はヨコケズリ、上半部はナナメハケを施し、内面下半部は不定方向のナデ、上半部はナナメハケが残るが、口縁部下は内外面ともヨコナデで仕上げている。胎土は白色砂粒を含む粘土で、色は赤褐色、焼成は良好である。

#### 鉄器 (図版40, 第61図)

6は鉄鍔で矢柄の一部とともに出土しており、鍔と柄は樹皮で巻いて固定している。鉄鍔の全長11.4cm、刃部幅1.5cmを計る。

#### 3号土壇 (図版29, 第62図)

不正長方形の祭祀土壇で北東部で2号土壇を切って掘り込まれている。主軸をN-41°-Eにとり主軸長1.89m、最大幅1.52m、現深さ0.42mを計る。

土壇は二段に掘り込まれており、土壇西・南側の深さ20cm程に一段めのテラスが見られる。

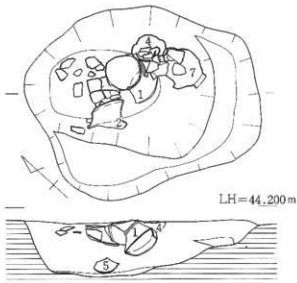
祭祀行為の対象となる石棺墓を特定することはできなかったが、その位置関係等から推察すると、3、4号石棺墓、あるいは調査区外の新たな石棺墓あたりが概当するのではなかろうか。

埋土中から複合口縁壺、甕等が出土しているが、1~4、7の上層土器群と、5、6の土壇底部付近出土の土器群に分けられた。

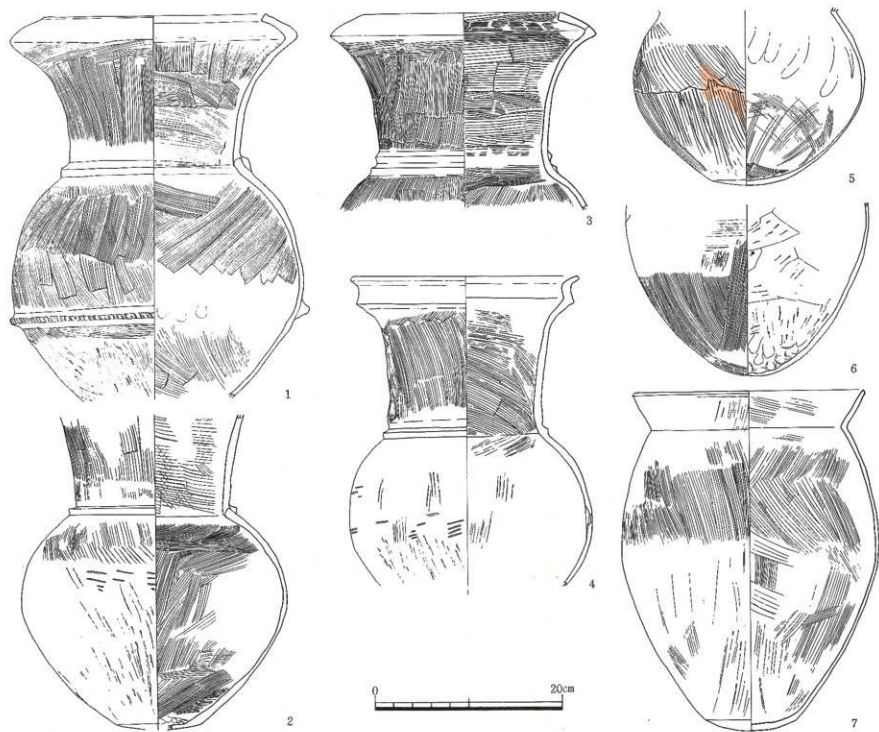
#### 土器 (図版41, 第63図)

1~4は複合口縁壺である。1は底部を欠失しており、口縁径23.4cm、胴部最大径30.2cmを計る。胴部は球形で最大径部に内厚で刻み目を施した突帯をめぐらす。頸部との接合部にも一条の三角突帯がめぐっており頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部はくの字状に大きく内湾している。口唇部は断面口の字状で若干肥厚する。外面胴下半部ではケズリ、上半部および頸部にはタテハケ調整、内面胴部はナナメハケ、頸部中央下はヨコハケ、上方はタテハケ調整を施している。口縁部は内外面ともヨコナデ仕上げが行なわれる。胎土にはやや大きめの白色砂粒を含む粘土が用いられ、色調は乳褐色、焼成は良好で、胴中央に黒斑が残る。

2は口縁部付近を欠失しているが複合口縁壺であろう。底部はふくらみをもつ平底で復元した底径9cm、胴下半はやや直線的に立ちあがっているため胴部最大径は胴中央よりやや上方へ



第 62 図 3号土壇実測図 (1/30)



第 63 图 3号土壩出土土器实测图 (1/4)

かたよる。径は28.2cmである。頸部との接合部には三角突帯がめぐる。頸部はほぼ直立するが上方では若干外反さみである。胴外面には左上がりのらせん状のタキの後ケズリが施されており、肩部から上方、頸部にかけてはタテハケが行われている。胴内面には比較的細いタテ、あるいはヨコハケが行われる。頸部にもヨコハケが施されているが粗いハケメを残している。胎土にはやや粗めの粘土が用いられており、色調は明褐色で、焼成は良好であるが、やや軟質である。

3は1と同様の形態を示す複合口縁壺で口縁径20.8cm、口縁部の内傾度が1よりきつ口唇部もより顕著に肥厚する。胴部と頸部の境の三角突帯は二条めぐらされている。内外面ともハケ調整を基本としており、外面はタテ、胴部内面はタテ、頸部はヨコハケで仕上げているが、口縁外面だけはヨコナデ調整が行われている。胎土は、砂粒を多く含む粒土で色調はやや赤みを帯びた淡黄褐色。焼成は良好である。

4は口縁が直立するものである。口縁径23.8cm、胴部最大径26.0cmを計り、ほぼ球形の胴部から三角突帯をはさみ頸部へと続くが、頸部はほぼ直立し、口縁部下で大きく外反する。口縁部は再び直立するが端部は鋭く外傾し口唇部は丸みをもって終了する。胴下半にはケズリが行われており、最大径付近には右上りのらせん状タキの痕跡がみられる。胎土は大粒の白色砂粒を多く含むが精良な粘土で、色調は明褐色、焼成は良好であるがやや軟質な状態である。頸部、および口縁部は西側暖斜面第3層埋土中から出土した。

5は短頸壺で胴部最大径24.4cm。胴部は扁平球形を呈し、底部は丸みがかった平底である。口縁はくの字状に外反する。胴外下半部はケズリの後にタテハケ、上半にはナナメハケが施され、内上半にはナデ、下半部にはナナメハケが丁寧に施されている。胎土には白色砂粒が多く、色は明褐色で焼成も良好である。有黒斑土器で、外面と割れ口に赤色顔料が付着していた。

6は丸底甕で胴部最大径は25.4cm、底部は尖りさみの丸底を呈す。外面はタテハケが主で最大径付近には一部その上にヨコハケが行われている。内底部は押圧調整痕がみられるがその上にはタテハケ、胴中央には左上がりのナナメケズリが行なわれている。胎土は白色砂粒を多く含む粘土が用いられており、色調は外面明橙褐色、内面黄褐色で、焼成は良好堅緻で有黒斑である。

8は丸みがかった平底形態を示す、長胴壺である。器高36.5cm、復元口縁径24.0cm、胴部最大径27.0cm、底径9.6cmで、胴最大径は胴中央部より若干上にある。胴部はゆるやかに弯曲しながら上方ではすぼまり、鋭くくの字状に外反して口縁部にいたり、口唇部は断面コの字状に整形されている。器面調整は胴下半部においてタテハケの後板状工具によるスリ消しが行なわれる他はタテハケあるいはナナメハケ調整が主である。口縁外面にはタテハケの後ヨコナデがみられる。胎土には白色砂粒を多く含むやや砂粒のまじる粘土が用いられており、色は暗茶褐色焼成は良好であるが、二次的焼成を受けているのか外表の器表の剥落が著しい。

#### 4号土壇 (図版31, 第64図)

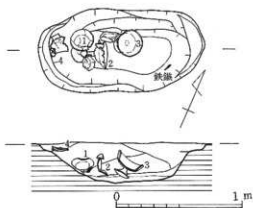
6号石棺の東に位置する全長1.33m, 最大幅0.67mを計る楕円形状の土壇で, 現深さは0.32m。主軸はN-67°-Wに方向をとる。掘り方は2段に分かれており一段めは現地表からの深さ5cm程で狭いテラスを主軸方向両端に残している。土壇床面上より発見された土器3の口縁部の一部が5号石棺墓内埋土から出土しており, 口縁部は意図的に打ち割り石棺墓壇内に埋置されたと相定するならば, 4号土壇は, 5号石棺墓の葬送儀礼に使用された儀器の廃棄の廃棄土壇として考えることができる。

土壇底部より若干遊離した状況で高杯、壺が、一段めのテラスとほぼ同じレベルで有蓋鉄鉢が1個出土している。

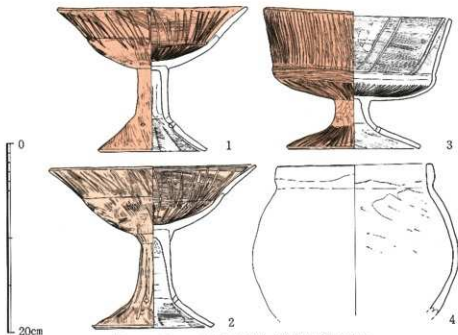
#### 土器 (図版42, 第65図)

出土した土器は, 4を除きほぼ完形に復元することができた。

1~3は高杯で, いずれも焼成後の丹塗りである。1は器高15.3cm, 口縁径19.9cm, 脚裾径11.0cmを計る。杯底部分は丸みをもってゆるやかに内弯して口縁部との接合部には明瞭な段を設け



第 64 図 4号土壇実測図 (1/30)



第 65 図 4号土壇出土土器実測図 (1/4)

る。口縁部はゆるやかに外反しながら上外方へのびる。杯底部と口縁部の長さの比率はまだ杯底部のほうが優位を保っている。脚柱部は直立し中途よりくの字状に屈曲してらっぱ状に脚裾にのびる。屈曲部直下には3方向ほぼ等間隔で円孔があげられている。裾端部はコの字状に成形する。外面調整は基本的にはハケによって整形した後、脚柱より上にはナデが加わり、杯口縁部には内外面とも連続鋸歯状の研磨が暗文状に周縁をめぐる。内面の杯底部と口縁部の接合部にはへら状工具によって明瞭な稜がめぐらされている。胎土には雲母片を含む精良な粘土を用いており、色調は淡赤褐色で焼成は良い。口縁下と脚裾同一方向に一部黒斑がみられる。

2は1と同様の形態を示すが1よりひとまわり大きく、器高17.1cm、口縁径21.7cm、脚裾径12cmを計る。杯底部は内湾きみにたちあがり接合部から逆に外反して外側に大きく開く口唇部は断面コの字状である。脚柱部は若干上すばまりきみで杯部との境には粘土帯を巻いて接着後の補強を行う。器表外面にはハケ調整が行なわれているが粗いハケであらましを整え細かいハケで細部調整を試みたようである。口縁部下にはやはり連続鋸歯状の研磨が暗文状にめぐっており、脚柱部にもタテ研磨が施される。杯内面には断続的なヨコハケの後上下二段にわたる鋸歯文状の研磨が行なわれていた。脚柱内面にはケズリが行なわれ裾部はヨコハケ調整で器表を整えている。胎土には雲母片を含む良質の粘土を使用しており、色調は赤褐色で焼成は良好である。口縁縁辺の一部に黒斑が観察される。

3は短脚の高杯である。器高15.0cm、口縁径19.4cm、脚裾径13.9cmを計る。杯底部は扁平な椀状で外縁部寄り急カーブを描いて立ちあがり、接合部からくの字状に屈曲してほぼ直線的に上外方へ伸びる。口唇部はやや凹まったコの字状をなしている。脚柱部は高さ2cm程と短く杯部との接合部から下って一度すばまった後に大きくなだらかに反り返ってから直線的に脚裾部まで伸びている。端部も口唇部と同様に凹まりきみの断面コの字状である。脚裾中途にはほぼ等角度にふって円孔が3ヶ所設けられている。杯外面はタテハケの後三種類の研磨が行なわれており、底部は断続的な放射状の研磨、屈曲部下には丁寧なヨコ研磨、立ち上がり部には丁寧な暗文状の断続的な研磨が施される。杯内面にはやはりハケ調整の後底部には放射状の断続的研磨、屈曲部に接合の際のナデ調整を挟んで、立ちあがりには二本一組のタテ方向の研磨が等間隔に周縁をめぐる。脚柱部外面には細かいへらナデが行なわれ、脚裾部には再びタテハケの後に放射状のタテ研磨がみられる。胎土には雲母片を多く含む良質の粘土を用いており、色調は淡赤褐色で焼成は良質堅緻である。口縁下と脚裾上下に一部黒斑が現る。

4は短頸壺で、復元口径15.7cm、胴部最大径21.8cmを計る。胴部はやや扁平状の球形を呈しており、最大径はほぼ胴中央部あたりか。口縁部はほぼ直立するが中途で外側に向けてやや肥厚するので外見上くの字状に弯曲しているように見える。外面器表の調整は剥落が著しいためその詳細は不明であるが、胴内面には左上がりのナメケズリの後ナデ消しがみられる。胎土には長石粘を含む粗い粘土を用いており、色調は赤褐色、焼成は良好である。

鉄器（図版42，第66図）

有茎鉄鍔で、現存長6.2cm，刃部は菱形，茎部は正方形の断面形を呈す。木質繊維は残っていなかった。



7号土壙（図版31，第67図）

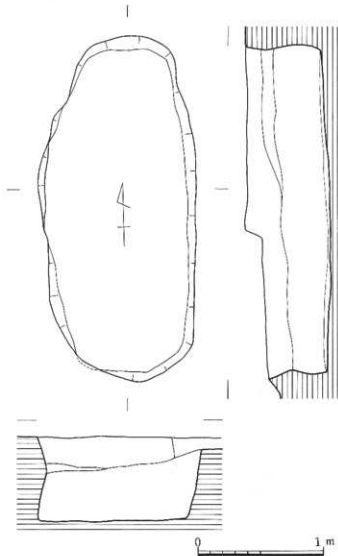
第66図 4号土壙出土鉄鍔実測図（1/2）

調査区南側やや西寄りに位置する祭祀土壙で、8号土壙に切られている。平面プランは長楕円形で、 $N-2^{\circ}-E$ に主軸方向を向ける。主軸長2.74m，最大幅1.2m，現深さ0.66mを計る。土壙壁面はほぼ垂直にたちあがるが南北壁，西壁はその中途がオーバーハングしている。付近には東側に9号石棺，そのさらに東には8号石棺墓が位置するが，9号土壙との位置関係を考慮すれば，祭祀行為の対象は9号石棺墓であった可能性が高い。

埋土中には多量の弥生中期土器とともに図示した長頸壺，椀が出土しており，またこれらと同レベルより朱塊が出土しているが，発掘中途の合間をぬって現れた訪問者によって無残にも踏み壊されていたため，実測図に図示できぬ結果となったことは遺憾である。よって出土状況については出土状況写真によって察していただきたい。

土器（図版43，第68図）

1は長頸壺で完形の状態で出土した。器高22.2cm，口縁径7.6cm，頸高13.6cm，胴部最大径17.4



第 67 図 7号土壙実測図（1/30）



cmを計る。胴部は扁平な球形状を呈しており、底部は丸底である。頸部は胴部から鋭く屈曲してほぼ直立し、なだらかに外反する。口唇部は尖りぎみに丸くおさめている。

器面の成形は大きく三段階に分かれており、胴下半、上半部、頸部と分けて、それに沿った調整が観察される。胴外面下半はまず細く連続的な研磨を施し内面には強いヨコハケ調整を行う。上半部との接合部である胴部最大径部には丁寧なヨコ研磨を施し、内面にはヨコナデ、上半部外面にはナメハケを施している。内面にはナデ押圧調整のみで頸部と接合する。頸内面には数条の粘土接合痕が残存しており、また中途には絞り痕ヨコハケも残るが、口縁下は丁寧なヨコナデ仕上げを行う。胴部上下部には、それぞれタテ研磨が暗文状に粗に施されており、頸部には往復タテ

研磨が密に行なわれる。

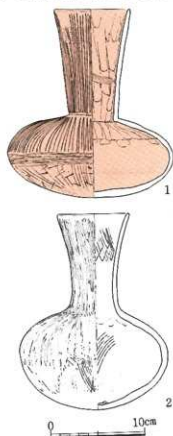
胎土は長石粒を含む良質の粘土を使用してお

り、色調は淡赤褐色、焼成も良好である。外面には赤色顔料の塗布が行なわれている。

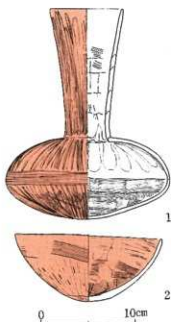
2は椀である。器高7.1cm、口縁径15.4cm、底部はほぼ丸底であるがすかに平底の名残りとどめた稜をみることができる。体部はゆるやかに内弯しながら上外方へのび端部は尖りぎみに丸くおさめる。外面下半は軽いヘラケズリを行い、上部にはヨコナデがみられるが一部ヨコハケの痕跡が残っている。内面底部には言わゆるくもの巣状断続的ハケ調整を行い、中途から口縁にかけて細いナメハケで仕上げる。胎土は白色砂粒を多く含み、暗黄褐色で焼成も良好である。体部の一部には黒斑が残っており内外面ともに赤色顔料の塗布、付着が認められる。

#### 9号土壙 (図版32, 第70図)

8号土壙の南東に位置し、22号住居跡にその南を削られた祭祀土壙である。平面形は不正長楕円形を呈し北東側は角張っている。主軸はN-43°50'-Eに向けられ、主軸長2.37m、最大幅1.63m、現深さ0.72mを有す。土壙西部と



第 69 図 9号土壙出土土器実測図 (1/4)



第 68 図 7号土壙  
出土土器実測図 (1/4)

北東部が一段深く掘り込まれており、北東掘り込みの上に集中して祭祀土器が廃棄されていた。石棺墓との位置関係からして8号石棺墓の祭祀に対応するものと推測される。

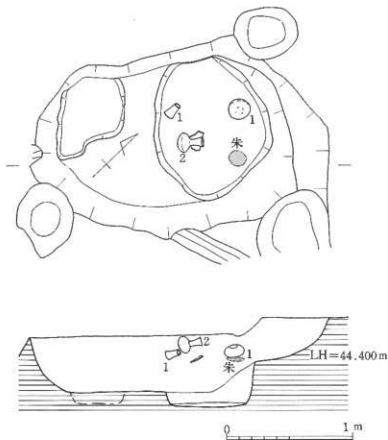
埋土中からは多量の弥生中期後半の土器とともに壺形土器2個体と、それらとほぼ同レベルにおいて朱塊が出土している。

土器 (図版43, 第69回)

出土した土器は長頸壺2個体で、1は頸下部から切損した状態で、2は完形のまま横転した状態で出土した。

1は、7号土壘出土の長頸壺とほぼ同様の形態を有すもので、器高19.9cm、口縁径7.9cm、頸高11.3cm、胴部最大径17.5cmを計る。外面胴下半にはケズリを行っており内面には強い左上がりのナナメハケを施す。頸部は7号土壘出土例ほど絞りきっておらず、胴部との接合部からゆるやかに外開きに広がっており、内面も丁寧にナデ押圧が加えられている。胎土には雲母片角閃石小粒を含む精良な粘土を用いており、色は淡桃褐色で焼成は良好や軟質というところか。内外面ともに赤色顔料の塗布、付着が観察される。

2は1と趣を異にする肉厚、強圓な感を与える長頸壺で、器高20.6cm、口縁径7.4cm、胴部最大径15.7cmを計る。底部はほぼ丸底で胴部は厚く胴上部で若干肩を張る。頸部との境は1ほど明瞭ではなく、胴上部から反りながら直立し、頸中央部から外反して口縁にいたる。口唇部はやや丸みをもって収束する。外面は底部と口縁部がナデ調整によるのを除けば、タテ方向の



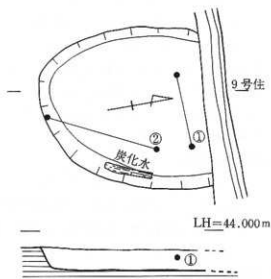
第70図 9号土壘実測図(1/30)

重複する丁寧な研磨によって仕上げられており、内面には底部と胴部の一部、それに頸上部のナナメハケ調整を除けば、大半はヨコナデ押圧調整によって仕上げている。胎土は角閃石、長石粒を多く含む良質の粘土を使っており色調は赤褐色で、焼成も良好堅緻である。

## 貯蔵穴

### 6号土壙 (第71図)

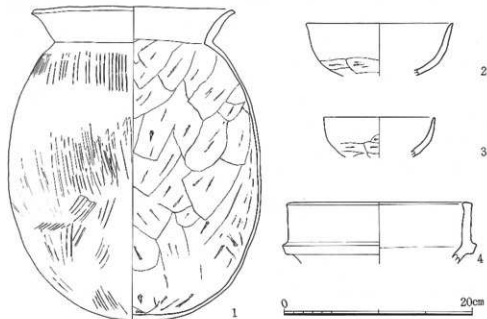
10号住居跡の北側に掘られる土壙で長楕円形の平面プランを有す。10号住居跡に伴う貯蔵穴であろうが、9号住居跡との切り合い関係を誤認していたために、土壙の北側を9号住居埋土とともに掘り下げてしまった。土壙幅は1.27m、住居跡床面からの深さは0.16mを計る。土壙埋土中位から土師器甕、椀等が出土している。



第 71 図 6号土壙実測図 (1/30)

### 出土土器 (第72図)

1は口縁径21.0cm、器高33.3cm、



第 72 図 6号土壙出土土器実測図 (1/4)

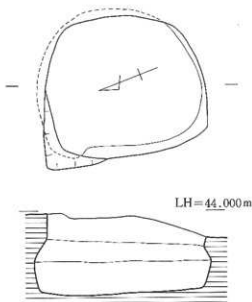
胴部最大径26.7cmを計る長胴形甕である。胴部最大径が、中位より若干下がるために丸底であるにもかかわらず底部の接地面積は広い。口頸部の屈曲は明瞭でくの字状に外反した後まっすぐに口唇部に伸びる。口唇部は断面コの字形で、下方は少し外側につまみ出す。胴外面調整はタテハケの後にナデ消しが行われ、内面はヘラケズリ、口頸部は内外面ともヨコナデで仕上げている。胎土は粗く、色は淡黄褐色で焼成は良好である。胴中位から下方にかけて部分的に煤の付着がみられる。2、3は椀で2は口縁径15.2cm、3は11.8cm、いずれも外面下半にヘラケズリを行い口唇部はヨコナデを施しまるくおさめる。いずれも胎土は良好で2は明赤褐色、3は明橙褐色を呈し、ともに焼成良好である。4は二重口縁壺で、口縁部は直立し口唇部は断面コの字形、内側に鈍くつまみ出す。胎土は長石粒を含む精緻な粘土を用い、淡赤褐色で焼成は良好である。

### 12号土壘 (第73図)

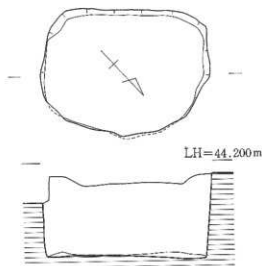
平面プランは北西部が若干崩壊しているものの、隅丸長方形を呈し主軸長1.27m、幅1.13m、地表からの深さ0.62mを計る。北および北東側は深さ20cm程から奥行10~15cmのオーバーハングしており断面が袋状をなす。11号土壘に切られており、埋土中からは弥生中期後半の土器片が出土している。

### 13号土壘 (第74図)

8号土壘に東半部を切られる平面プランが隅丸長方形の土壘である。主軸長1.35m、幅1.1m、地表下0.67mを計る。壁面はほぼ垂直に落ち底面にいたる。埋土中から弥生中期後半土器片が出土している。



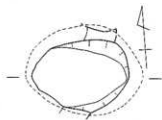
第 73 図 12号土壘実測図 (1/30)



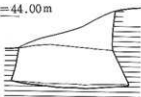
第 74 図 13号土壘実測図 (1/30)

#### 14号土壇 (第75図)

19号住居跡の北西に隣接して掘られた貯蔵穴で、平面プランは東西に長い楕円形状を呈している。西側斜面にかかっているため、西半部の削平は著しい。現状では主軸長0.75m、幅0.58m、深さ0.6mで、地表下30cm程でオーバーハングし、断面袋状をなしている。埋土中からは弥生中期後半の土器片が出土した。



LH=44.00m

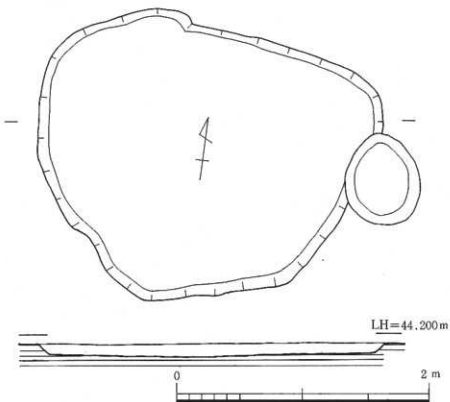


#### その他の土壇

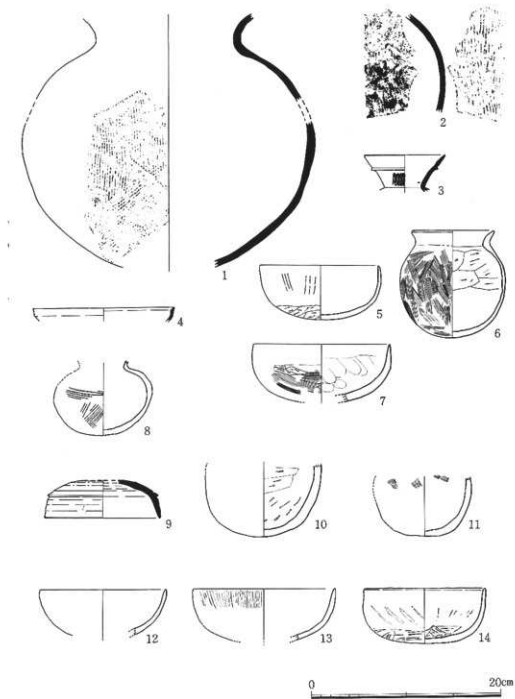
#### 1号土壇 (第76図)

8号住居跡の南西に位置する不整形

第 75 図 14号土壇実測図 (1/30)



第 76 図 1号土壇実測図 (1/30)



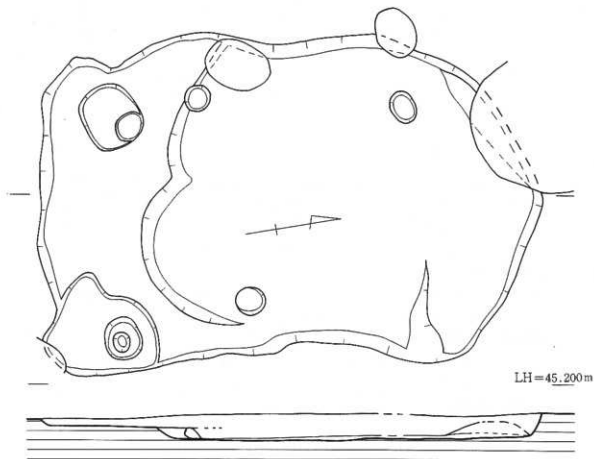
第 77 图 1·8·11号土壤出土土器实测图(1/4)

の土壌である。

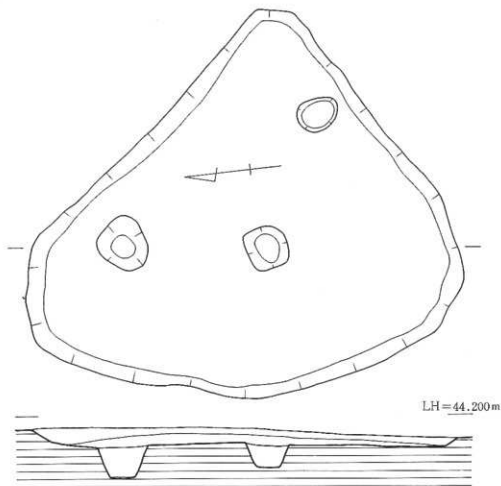
#### 出土土器 (第77図)

1～4は須恵器である。1は甕で復元した胴部最大径は31cm、胴外面にはタテ平行タタキが施されており肩には平行沈線が刻まれており、内面は丁寧にナデ消しが行われる。胎土は砂粒をわずかに含む程度の良質の粘土で、色は青灰色、焼成は堅緻である。3は甕口頸部で頸下部には播流波状文を一条めぐらしてあり、その上に三角突帯を配している。口唇部は丸くおさめる。胎土は精良で色調は暗灰白色をなしており、焼成は堅緻である。4は高杯口縁片であろうか。復元口径は15cmで口唇部は内傾する平端面を有する。色調は暗灰黒色で焼成は堅緻である。

6は土師器小形甕で口縁径8.5cm、器高11.4cm。外面はやや細いタテハケで仕上げしており、内面下半はケズリの後ナデ、上半にはヨコケズリを施している。胎土には角閃石粒を含み、色は暗茶褐色で、焼成は良好である。



第 78 図 11号土壌実測図



第 78 図 8号土壇実測図 (1/40)

#### 8号土壇 (第79図)

平面プランは三角形の不正形土壇で7号, 9号土壇, 9号石棺墓を切っている。底面に3個の柱穴が掘られている。埋土から第77図・8に図示した土師器細頸壺が出土している。

#### 11号土壇 (第78図)

10号土壇に北端を切られる長方形の平面プランを有す土壇で南側に一段高いテラスが削り出される。底面には小柱穴が3個掘られているのは8号土壇と共通している。

#### 出土土器 (第77図)

9は須恵器杯蓋で天井部は平端面をなし、稜近くまで回転ヘラケズリを施している。復元口径は12.2cmで口唇部は丸く仕上げている。胎土は白色小砂粒を含む良質の粘土で色は暗青灰色を呈し、焼成は堅緻である。10, 11は丸底壺胴下半部であろう。